

SUMMER STUDIO 2020 REPORT

リアルな社会と
つながり、
向き合う。
取手市の未来像
「郊外 2.0」を
提案する。

2020 9/12-9/22

リアルな社会とつながり、 向き合おう。 取手市の未来像 「郊外2.0」を 提案する。

SUMMER STUDIO 2020

ゲスト

饗庭伸

東京都立大学 教授

石川初

慶應義塾大学 教授

畝森泰行

畝森泰行建築設計事務所 代表

三島由樹

株式会社folk 代表

キックオフミーティング

9/12

プレサーベイ

9/13 - 9/18

ワークショップ

9/19 - 9/22

応募締め切り

8/14

| 金 |

学生応募フォーム



開催概要

開催趣旨

茨城県取手市と前田建設工業の後援を受け、取手市を舞台としたデザインワークショップを開催しました。取手市は、東京首都圏の「郊外」を形成する街の一つです。郊外のほとんどは高度経済成長期の急激な人口増加の受け皿として開発されました（郊外 1.0）が、現在では、少子高齢化や公共施設老朽化、財政難など多くの課題を抱えています。しかし、近年の高度な情報技術の発達や働き方改革、緑豊かな環境への関心により、郊外に住む、働くことへの考え方は多様化しています。また民間企業の活力を利用したまちづくりも盛んに行われています。さらに新型コロナウィルスの蔓延により、過密した都心ではなく空間に余裕がある郊外での生活も注目されています。このように郊外は大きな変革期に差し掛かっており、取手市でも「選ばれるまち」をスローガンに掲げたまちづくりが実践されています。

2020年のサマスタは、市制50周年を迎える取手市において、リアルな社会・郊外の現状と向き合い、これから50年の取手の未来像「郊外 2.0」を議論し、「選ばれるまち・郊外」となるために、ライフスタイルや生業を含めて提案します。また、今回のWSでは、新型コロナウィルス蔓延や東京オリパラの延期などによる不安定な社会情勢などを考慮して、今だからこそ抱く、都市への新たな眼差しや価値観を大切に活動していきます。

スケジュール

■キックオフミーティング 9/12 (土) @ZOOM

ガイダンス

課題説明・自己紹介・スケジュール説明

取手市より話題提供

中川勇紀 取手市役所政策推進部政策推進課

「取手市の概要・行政課題やその取り組みについて」

ゲストより話題提供

饗庭伸 東京都立大学教授（都市計画・建築）

「取手は都市計画的にいい形をしている」

石川初 慶應義塾大学教授（ランドスケープ）

「取手の庭」

畝森泰行 畝森泰行建築設計事務所代表（建築）

「地域と公共性」

三島由樹 株式会社フォルク代表（ランドスケープ）

「地域をつくる人々とつくる地域」

トークセッション

学生からゲストへの質問・参加者全員による課題に対するプレスト

■プレサーベイ 9/13 (日) ~ 9/18 (金)

チューターレクチャー

9/14 (月)・9/15 (火) @ZOOM

提案敷地や課題に対する基礎情報や話題の提供

集合住宅歴史館 (UR 都市機構) 見学

9/16 (水) @八王子

ガイド 独立行政法人都市再生機構 (UR 都市機構) 島一喜

■ワークショップ 9/19 (土) ~ 9/22 (火)

Day1

サーベイ結果発表・コンセプトの方向性確認

@ICI キャンプ (前田建設工業宿泊研修施設取手市)

Day2

コンセプト・サイトプランの確認

@ZOOM & 各チューターの事務所 (Day2~4)

Day3

最終発表に向けたラフプランの確認

Day4

最終発表・クリティック

審査員：キックオフミーティングのゲスト4名

阿部伸太 日本造園学会関東支部長、東京農業大学准教授

三島徹也 前田建設工業 ICI 総合センター長

彦坂哲 取手市政策推進部政策推進課課長

■まとめ本編集 10月~12月

目次

● 概要

社会情勢 P1

対象地 ~ 井野団地 ~ P3

● 各チーム提案

IAチーム P7

IBチーム P11

ICチーム P15

IDチーム P19

IEチーム P23

● ゲスト総評

P27

● 活動記録

学生アンケート P31

チューターコメント P33

スケジュール P35

参加者 P37

ご協賛・ご後援企業 P39

まとめ本編集委員会編集後記 P41

社会情勢

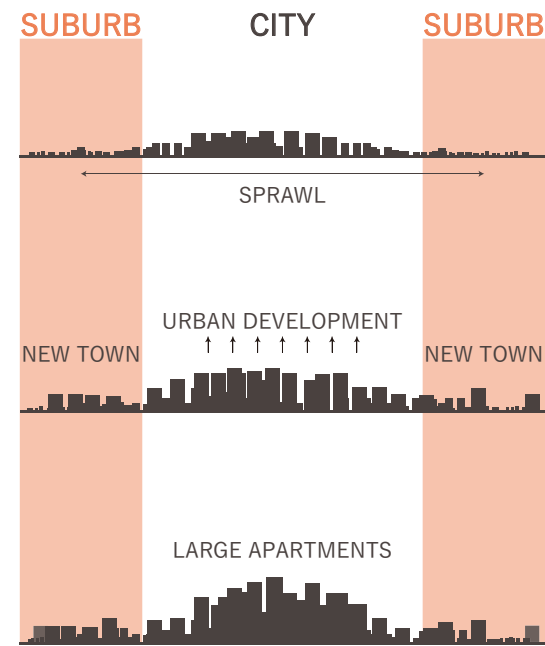
2020年、新型コロナウイルスの感染拡大によりまちの風景は変わった。人々のマスク姿は当たり前になり、人が密集する風景は減少した。私たちの暮らしにも大きな影響や変化のあった1年だったのではないだろうか。このページでは、2020年のテーマ「リアルな社会とつながり、向き合う。取手市の未来像『郊外2.0』を提案する。」に沿い、まず『郊外1.0』の風景を、住まいや暮らしという点から捉え直す。

「郊外」とは何か

そもそも「郊外」とはどこを指すのだろうか。「郊外」とは、市街地に隣接した地域、都市周辺部を指すが、この範囲は文脈によって様々で広大である。つまり、中心的な場所（中心市街地など）が存在しなければ成り立たない付随的な性格を持った地区であると言える。郊外開発の大半は高い開発需要によるスプロールだが、高所得者層による質の高い環境を求めての開発など、成立の背景は様々だ。郊外といえば、「都市に近い」「自然環境が豊か」「静か」などのイメージがあるが、近年では「画一的」「空き家」「衰退」といったネガティブなイメージもたれることも少なくない。



日本の移りゆく「郊外」



日本での郊外開発は戦後急速に進んだ。以降では日本における都市と郊外の変遷を辿る。

戦後

空襲で建物が消失した地に戦争から人々が帰還し、都市は深刻な住宅難に陥る。住宅需要を解決するため、公共事業として急速に住宅建設が行われ、都市では低家賃の木賃アパート建設、そして郊外には団地建設などスプロールがさらに加速する。とにかく住宅が不足していた当時は、「質より量」が求められた。

高度経済成長期

急激な人口増加、地方からの出稼ぎなどで人口が都市に流入し、さらに都市は高密度化した。同時に住宅は「量から質へ」と見直され始め、ニュータウンのように大規模な地域を対象に住宅と生活施設を一体的に整備する開発手法が広まり、大規模ニュータウンや団地が郊外に次々に建設された。質の高い郊外のニュータウンは当時人気を博し、特に若い人口が多く流れ込んだ。

バブル期～バブル崩壊まで

バブル期に入り、地価・住宅価格が高騰する。細分化されていた土地も地上げによって整地され、都心部で大規模・高額マンションの供給が続いた。90年代は「郊外化の終焉」と呼ばれ、郊外への転出も減少し、都心回帰の動きが見られるようになった。早い時期にニュータウンに入居した世代は高齢化し、若い世代は利便性を求め都心に戻り始めた。

これからの暮らし、これからのまち

現在も都市への流入人口が多く、郊外の人口はやや減少し始めている。この頃から大量のストックの更新期に入り、コンパクトシティの推進など都市も集約され始めている。一方郊外エリアでは少子高齢化、空き家の増加、公共施設老朽化などの課題が現れ始め、郊外住宅地や団地の「再生」事業が始まるようになった。まちの形態の変化のペースと社会や環境の変化のペースにズレがある限り、こうした課題は存在し続けるだろう。まちの姿は、これからも人々、環境、社会の影響を受けながら更新して、それぞれの『2.0』の姿に変化していくと考えられる。



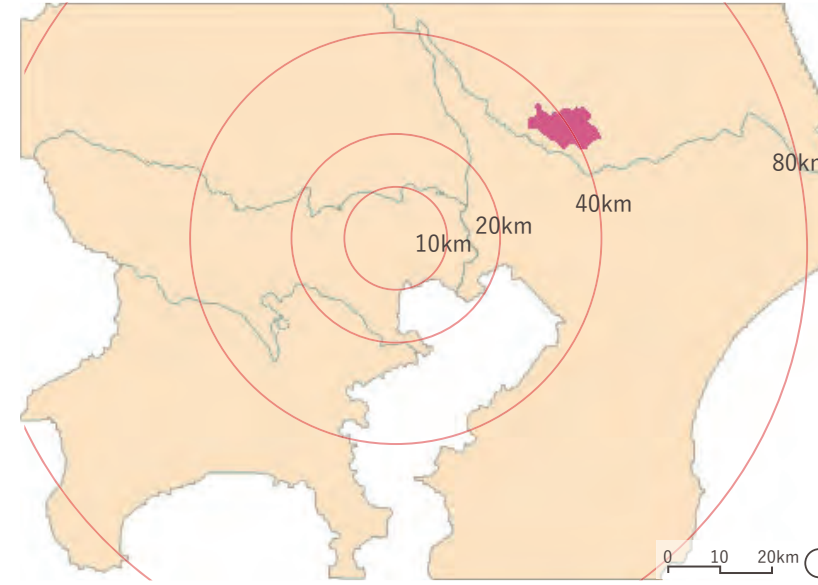
対象地：取手

2020年のサマスタの舞台となったのは茨城県、取手市。

取手市は茨城県の南端に位置し、総面積 69.94 km²、利根川とその支流である小貝川の二大河川が流れる水と緑に恵まれた地域である。茨城県の南部の玄関口であり、かつ東京、成田、つくばを結ぶ三角形のほぼ中央に位置していることから交通の要となっており、交通の利便性と自然環境に恵まれた都市環境をもつ『郊外』である。

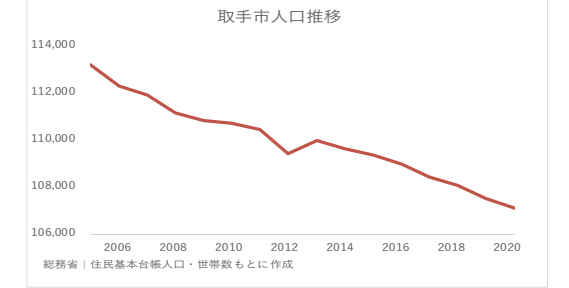
交通

取手市は東京から約 40 kmほどの距離にあり、電車でのアクセスは1時間ほど、車でのアクセスは常磐自動車道を介して、1時間ほどである。



人口

取手市の人口は日本全国の郊外にみられるように年々減少傾向にあり、大きな課題の一つとなっている。



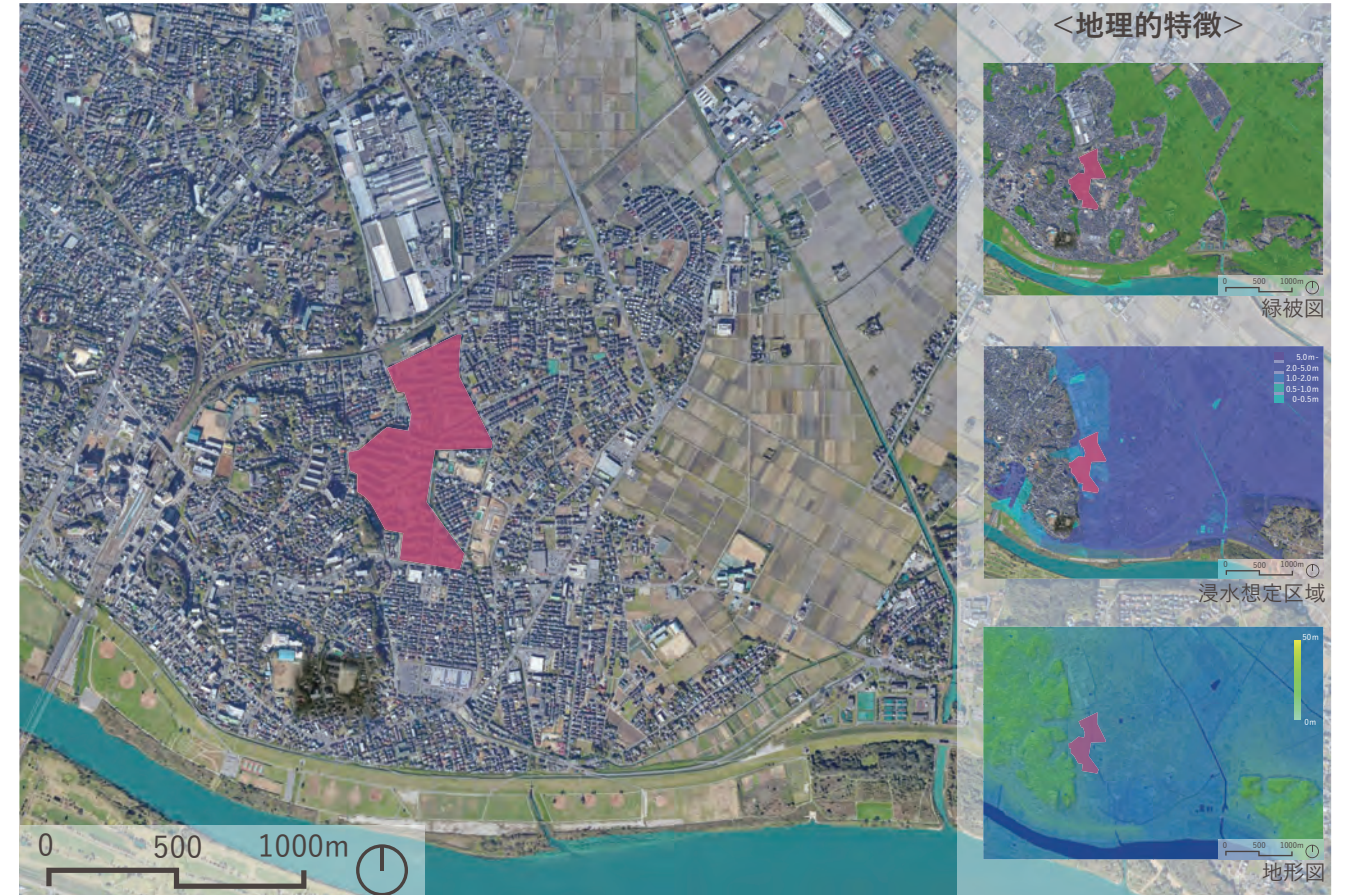
環境

小貝川と利根川に面した取手市は水系に富んだ立地であり、対象地である井野団地はかつては水田であった。



井野団地周辺

井野団地を中心に東側では水田、西側には台地が広がっている。また、利根川周辺では自然堤防となっている場所が何カ所か存在し、井野団地周辺は氾濫平野になっている。現在は住宅地となっているため、水田であった面影をなかなか感じる事が少ないが、地形図等を通してこの地では河川による影響を大きく受けながら人々の暮らしが営まれてきたことが読み取れる。



対象地 ～井野団地～

井野団地ってどんなところ？

約50年前、1969年に入居が開始した井野団地は、住戸数2166の大規模団地である。
計画当初に植えられた植物は50年の月日を経て成長し、現在もその豊かな緑環境が風景として残っている。
設立当時に多くのオープンスペースには四阿や遊具などが配置され、休んだり遊んだりできる居場所が団地内に点在している。



住棟と生茂る緑



点在する四阿



子どもがあそべる遊具

①ポイントタワー型住棟
住棟の形や配置は全てが均質ではなく、多様に存在している。



⑥桜並木
用水路上にある通路からはビスタの効いた桜並木が一望できる。



②アーティストビレッジ
同市に東京藝術大学のキャンパスがあり、その活動の一部として団地内の一棟に「アーティストビレッジ」と呼ばれるアトリエがある。



⑤旧井野小学校
井野団地に隣接する旧井野小学校では、廃校となった今も住民がスポーツに励むなどの施設利用がある。



③団地内の施設
中心エリアにはコミュニティカフェや農産物直売所があり、住民の交流の場となっている。



④用水路
周辺が水田であった井野団地の中心には用水路が縦断しており、そこからは静かな水流を眺めることができる。





各班の提案

2020年度のサマースタジオでは、全24名の学生がA～Eの5グループにわかれ、プレサurveyと4日間のワークショップ期間をかけて各々の井野団地の姿を提案しました。A班、B班、E班のように、水に着目した同一テーマの中で三者三様の提案が生まれたり、「あそび」に着目したC班・庭をテーマとしたD班のように、それぞれの特徴が出たサマスタとなりました。

- 
A

溢れ出る波紋・井野団水

水上での暮らし # 住民と共に創る暮らし
- 
B

団地から岩へ

水 # 地形 # 越境文化 # 減築
- 
C

「あそび」のある団地暮らし

あそび # 多様化
- 
D

取手庭道

庭道 # 圃場
- 
E

水の庭

エコロジカルネットワーク # これからの農

提案

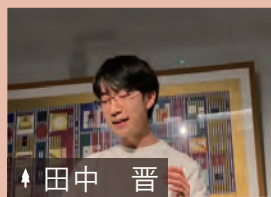
溢れ出る波紋・井野団水

#水上での暮らし

#住人とともに創り育てる暮らし



上林 就
東京大学
社会基盤学専攻 M1



田中 晋
東京農業大学
造園科学科 B4



徳永 啓祐
名古屋市立大学
建築都市デザイン学科 B4



前川 桃香
東京農業大学
造園科学科 B3



稲村 友里
千葉大学
緑地環境学科 B3

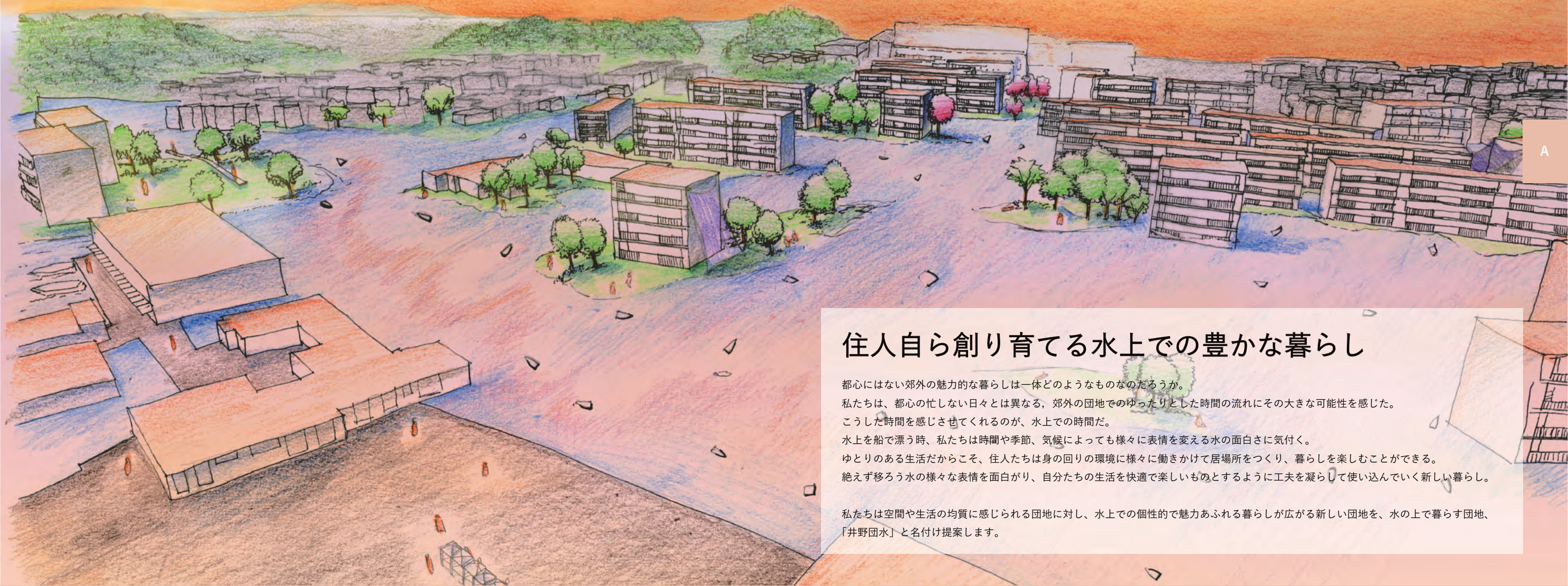


岸 孝
株式会社 プレイスメディア



木滑 公人
株式会社 日建設計

溢れ出る波紋・井野団水



住人自ら創り育てる水上での豊かな暮らし

都心にはない郊外の魅力的な暮らしは一体どのようなものなのだろうか。
私たちは、都心の忙しない日々とは異なる、郊外の団地でのゆったりとした時間の流れにその大きな可能性を感じた。
こうした時間を感じさせてくれるのが、水上での時間だ。
水上を船で漂う時、私たちは時間や季節、気候によっても様々に表情を変える水の面白さに気付く。
ゆとりのある生活だからこそ、住人たちは身の回りの環境に様々な働きかけて居場所をつくり、暮らしを楽しむことができる。
絶えず移ろう水の様々な表情を面白がり、自分たちの生活を快適で楽しいものとするように工夫を凝らして使い込んでいく新しい暮らし。

私たちは空間や生活の均質に感じられる団地に対し、水上での個性的で魅力あふれる暮らしが広がる新しい団地を、水の上で暮らす団地、「井野団水」と名付け提案します。



石川 初先生

制度に関係なく、地形に沿って広がる水の特徴を捉え、敷地境界を越えて水が広がっている様子がいね。



饗庭 伸先生

全体的にパブリックな感じが溢れているが、実際にはプライベートなものが多い。水を私有化していく中で水の文化を豊かにしていけるといいね。



畝森 泰行先生

水の提案をしているので、風の流れとかを調べてみると面白い。風が水や船に与える影響を考えてデザインするのも。

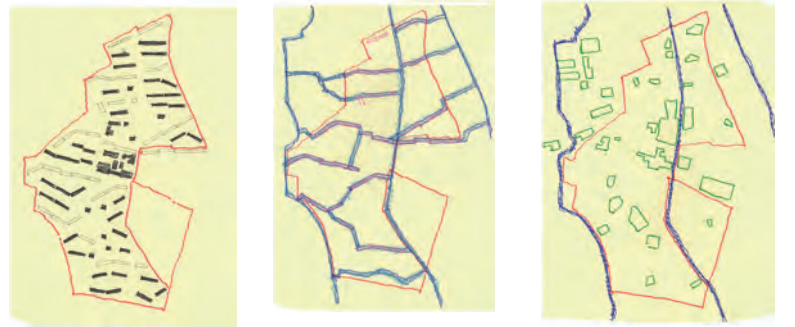
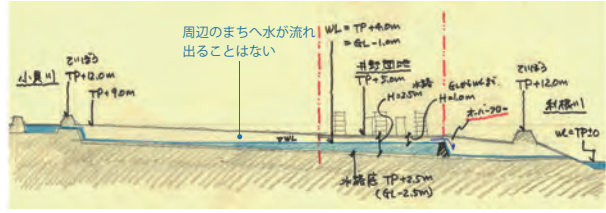


三島 由樹先生

小貝川と利根川の間の断面図で、水位の高さを示す広域の視点があったのが、とてもいいなと思いました。

PLAN

水上での暮らしは、3本の用水路を軸として段階的に実現する。これまで人の立ち入れなかった水路を親水空間としてデザインし、自然の作用と住人の使い込みがともに水面を広げていく。

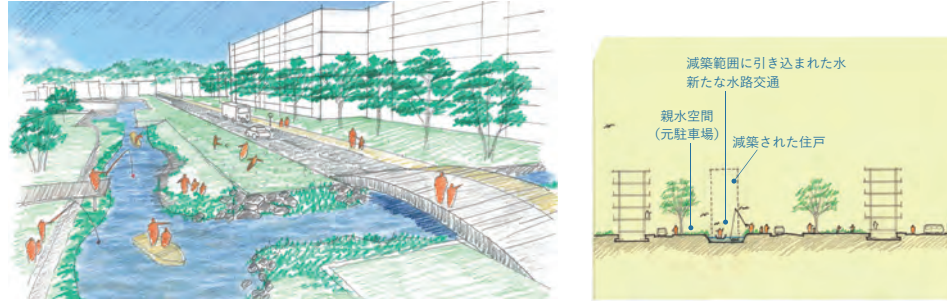


①住棟の減築 ②減築範囲に水を引き込む ③オープンスペースを水面に

STEP1 2025年 水路網による水と人の関わりの芽生え



減築する住棟を決め、井野団地周辺に流れる3本の用水路を往来し、団地内に水を引きこむ。小貝川から利根川の間中に位置し、引き込まれた水の高さは、団地内の地盤から1mほど下げた設定のため、周辺地区に水が溢れ出ることはない。
減築により、水路を作ることで、従来の道路交通と水上交通は使い分けて利用し、交差点に仮設の橋を設け、人々はその場に応じて、舟や車などの乗り物を使い分ける。



建物の前面には減築により水が引き込まれたことによって段階的に親水空間が生まれる。既存住戸から水路を眺め、船に乗ってゆったりするなど、敷地全体に張り巡らされた水路を契機に、水と人の関わり合いが少しずつ生まれていく。

STEP2 2050年 水面が住棟に近づき、住人が使い込む



住棟が南向きに配置された井野団地では、減築による水路は東西方向にのみ広がり、南北間のつながりを持たなかった。そこで敷地全体に点在する広場やグラウンド、駐車場などのオープンスペースを掘ることで、これまで南北間でつながっていなかった水路同士をつなぎ、水面を住棟とより近づける。より広範に張られた水面は、時間をかけながら氾濫など自然の作用によって広がっていく。



住棟と水面が近づいたことで水は住人の生活により身近な存在となり、住棟のリノベーションをして船着き場や水辺のみえるテラスを設けるなど、水のある暮らしをより楽しむような工夫が様々に広がる。

Chapter 住民自ら創り育てる文化



用水路沿いや神社にみられる周辺住民の園芸とその広がり、住民自らが快適な居場所を作り出して暮らしを送り、かつそれに共感した住民たち間でその輪が広がっていくというまちの文化である。

STEP3 2070年 広々とした水面が生活の舞台に



時々刻々と移ろう水の変化を感じ、自分たちで生活をカスタマイズしながら日常を楽しむ。



春になると満開になる桜は、かつて団地だったころに流れていた用水路の存在を思わせてくれるだろう。



夜に島を訪れ、焚火やランプなどのほのかなあかりのもとで行われる活動も幻想的な風景を生み出す。



水上に広がる暮らし、溢れ出る波紋

自然の作用や住人による利用の広がりによって、水路は面的につながり、島のような陸地がさまざまな形状で点在する。既存樹木の保全や、その島の住民が自然との接点を求めるために形成した痕跡が複雑に入り組んだ水際にみられる。住人たちは団水に住みながら、自分の居場所を創作し、水の見せる豊かな変化を楽しむ。かつてのように高密的に人が住むのではなく、隣室に余白を持つ。ゆとりあるスペースは生き物や周囲の人々に開放され、その周囲は水に囲まれ、一部水を引き込んだ建物には、水面からの気化熱による上昇気流によって、建物内に風が通り、住民間の関係さえも風通しの良いものとするところだろう。水面に広がっている波紋の様子は、住人自ら生活文化を育てている井野団水での暮らしぶりをそのものを示す象徴的な風景として、住人の心に留まり続けるだろう。



石川 初先生

これだけ新しいライフスタイルを考えてくれているので、乗り物に対する提案があったらより良かったね。



齋庭 伸先生

川から取水するという事は、上流と下流との関係性も出てくる。よりプライベートな利用を想定しながら提案を膨らませることもできるだろう。



飯森 泰行先生

テラスだけでなく、フローティングハウスなど新しいものを描くことを発展させていけるとより良いなと思いました。



三島 由樹先生

もっと地域ならではの、地域に根付いたアート、船などを提案の中で発展させていけるんじゃないかな。

団地から砦へ

#水 #地形
#越境文化 #減築



米ヶ田 里奈
東京電機大学
建築学科 B4



田中 亮平
東京農業大学大学院
造園学専攻 M1




加計 幸陽
法政大学大学院
都市環境デザイン工学専攻 M1



山本 実南
東京大学
建築学科 B3



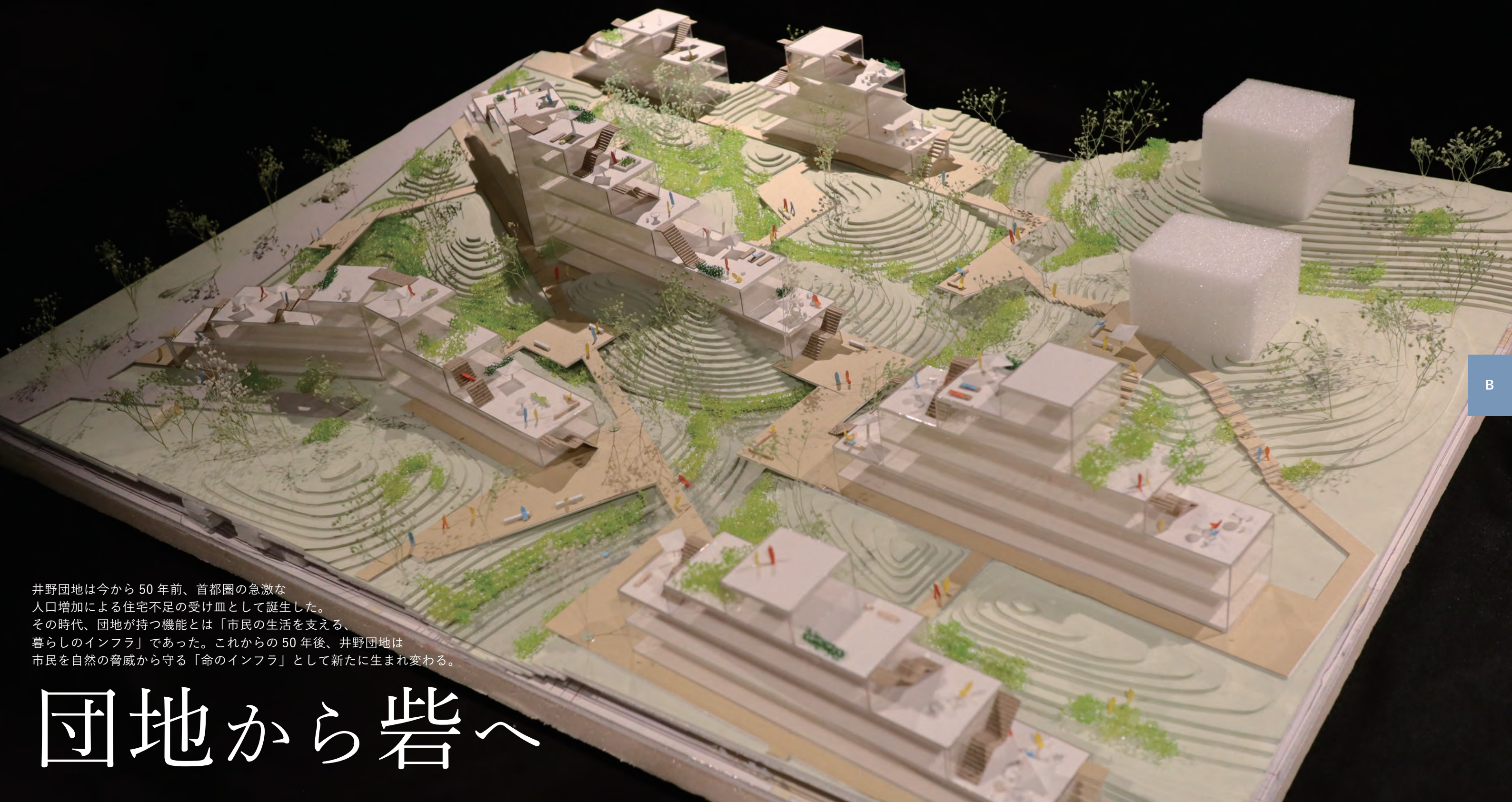
張 夢瑗
多摩美術大学大学院
環境デザイン学科 M2



小林 祐太
株式会社プレイスメディア



井野 貴文
株式会社グラック



井野団地は今から 50 年前、首都圏の急激な人口増加による住宅不足の受け皿として誕生した。その時代、団地が持つ機能とは「市民の生活を支える、暮らしのインフラ」であった。これからの 50 年後、井野団地は市民を自然の脅威から守る「命のインフラ」として新たに生まれ変わる。

団地から砦へ



岸 孝さん

低地の方の地域のための大きなインフラとして避難所のような機能を有していく提案ですね。



取手市 彦坂 哲さん

取手市の課題である「水への脅威」に対する備えや、人口減少への対応など、満遍なく盛り込まれた良いアイデアだと思います。



畝森 泰行先生

一見寂しいように見えるが、きっともっと前向きで新しい暮らし方に繋がっていくような提案だと思う。

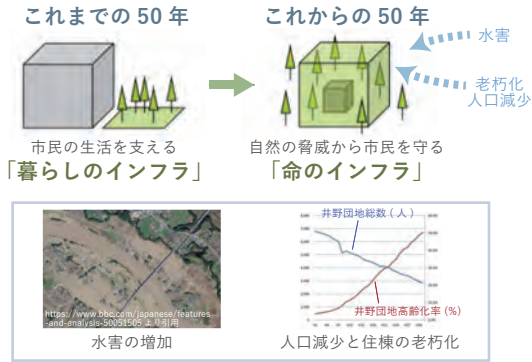


石川 初先生

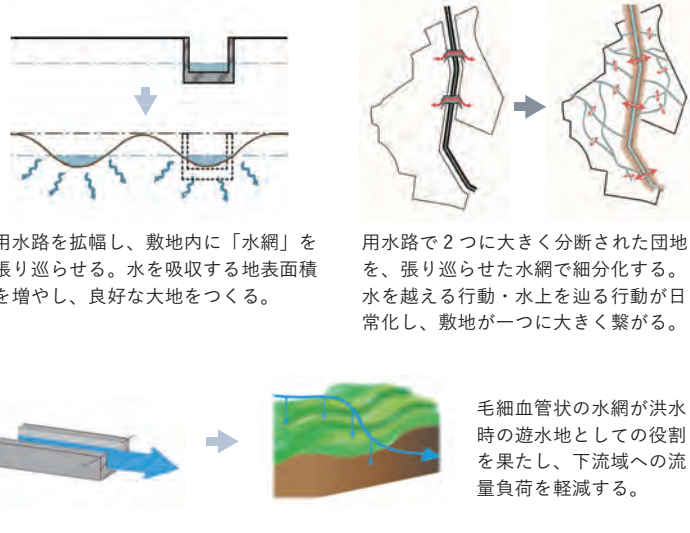
これはいいなー。全部水面にしないで土地が入り組んでいる未来としたのがすごく良いと思う。

提案の目的

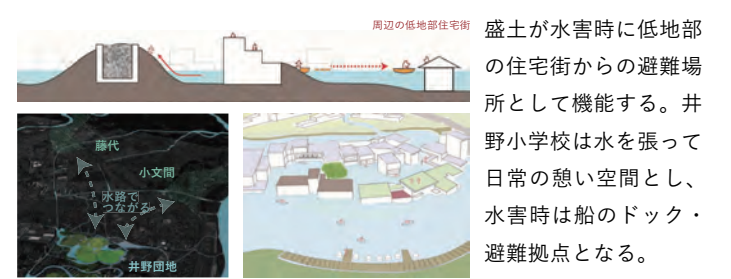
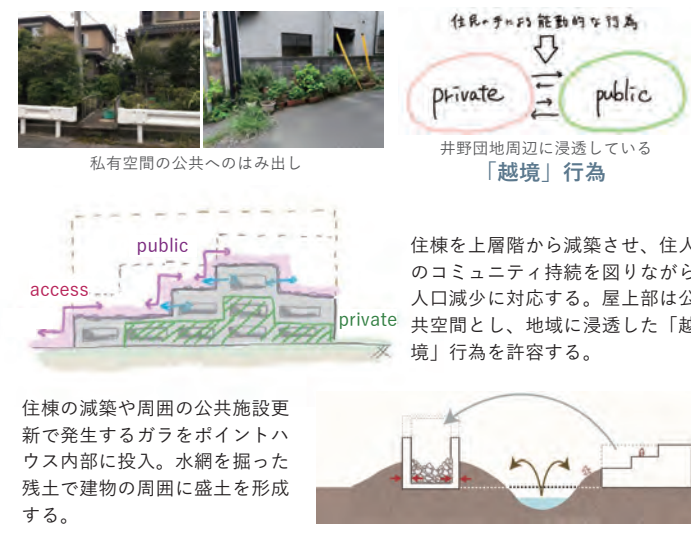
人口減少や住棟の老朽化、高まる水害の危険性といった課題を踏まえ、井野団地がもつ機能をこれまでの「暮らしのインフラ」から「命のインフラ」へ変える。団地内や周辺の市民が安全に暮らすための大地と自然のインフラをじっくりとつくる。



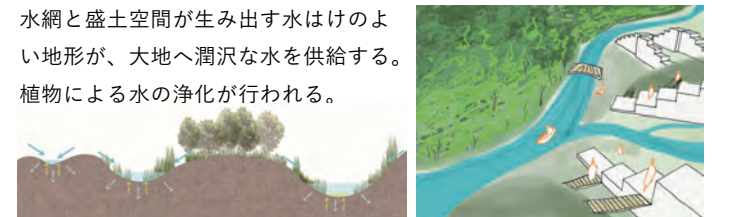
まちをささえる水網



人を守る地形・コミュニティの継承

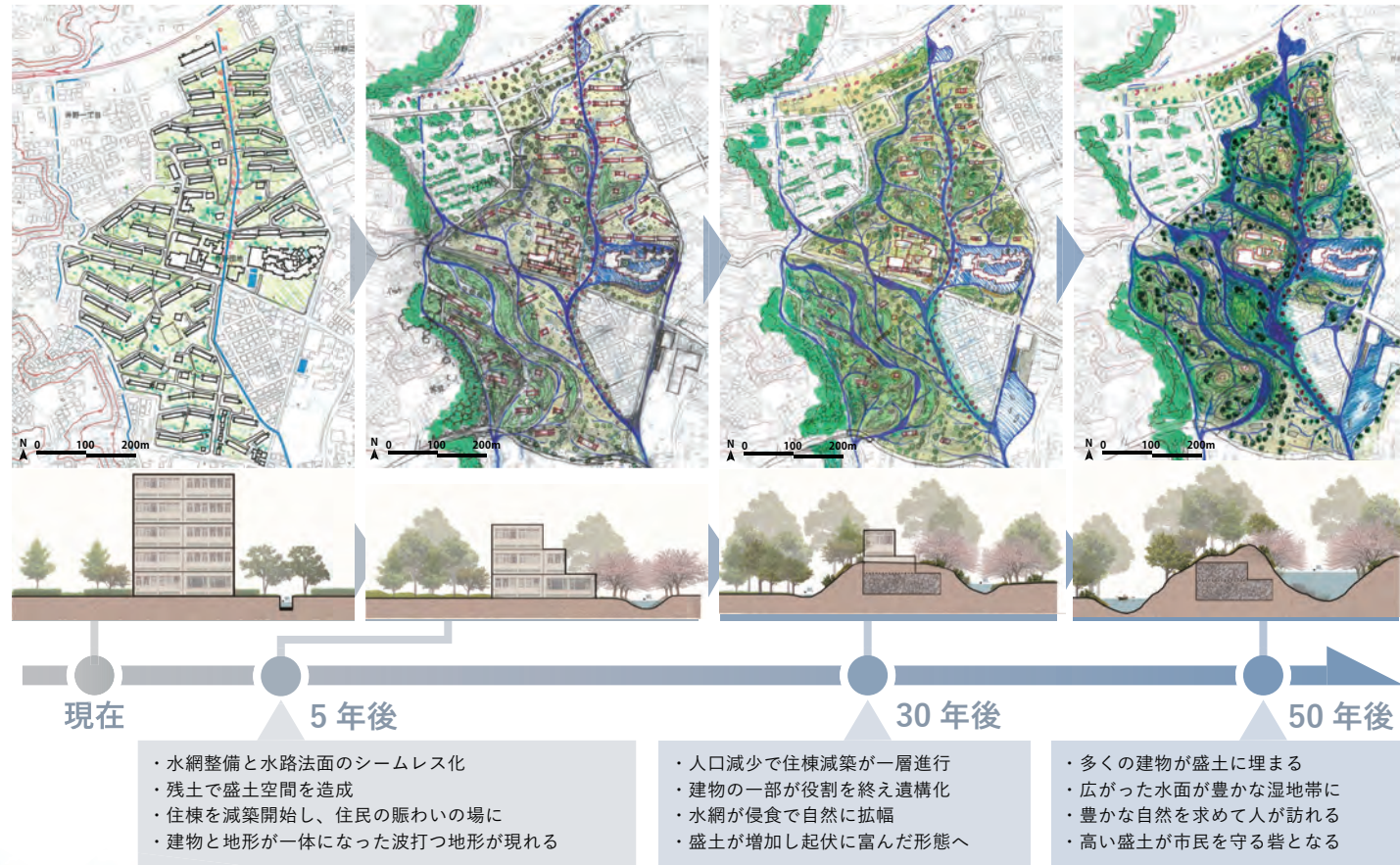


健全な植栽基盤



井野団地 50年の計画

減築と水網・盛土の空間を50年かけてじっくり作り変え、「命のインフラ」へと移行させる。



ターニングポイントとなる5年後の井野団地の姿



水田

湿地ライフが見たい！
湿った土地と一緒に生きる、湿地人の魅力的な生き方。

人口が減ると同時に自然が豊かになると、魅力的な場所になって今度は逆に住みたくなくなる人が続出するかもしれませんね。

まちレベルで既存敷地の評価をした上で郊外の今後を見据えた提案だと思う。「人数を増やそう・建替えて人を呼ぼう」という思考に対する彼らなりの疑問や、現地で感じた事を大切に提案に昇華できたことを評価している。

人間の手と自然が相まって美しい環境を維持していくような、新しい暮らし方に変わってくると思う。

「あそび」のある団地暮らし

#あそび
#多様性



相澤 航平
法政大学大学院
デザイン工学研究科 M1



草野 帆南
東京工業大学大学院
都市・環境コース M2



徳永 結衣
東京農業大学
造園科学科 B2



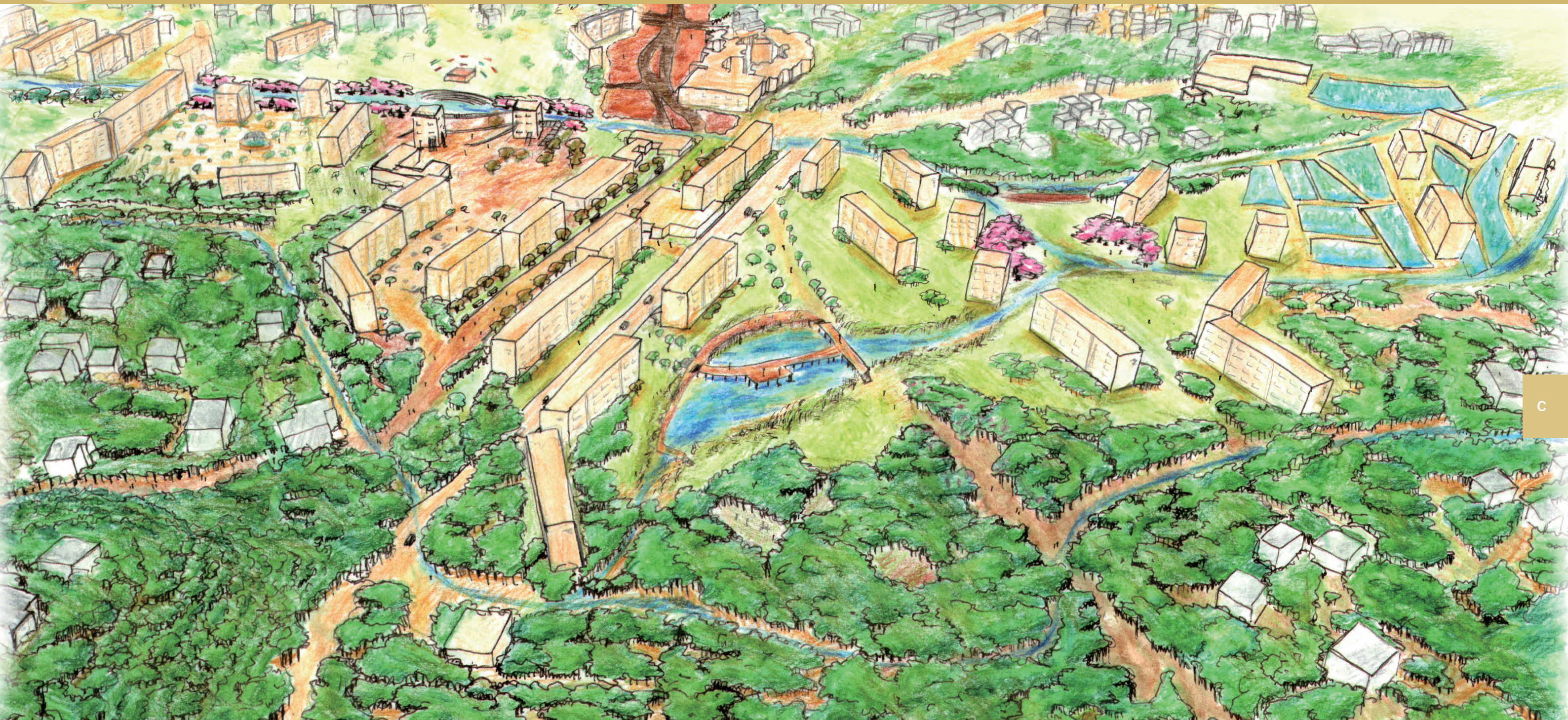
山本 翔太郎
東京農業大学大学院
造園学専攻 M1



原崎 寛明
ハイアーキテチャー



鬼塚 知夏
スタジオ・ゲンクマガイ



キーワードは「あそび」

この地域の空間の持つ個性やポテンシャルを発見し、それぞれのポテンシャルを活かすように空間に「あそび」をもたせる。生まれた空間の「あそび」は重なり合い、多様な暮らし方を受け入れる場所を育てる。都市への移動にとらわれない未来の郊外では、場所や時間に捉われず思いのままに暮らす＝「あそぶ」ように暮らすことができる風景を描く。



饗庭 伸先生

都市の中で1番心地いい場所を自分の知らない場所も含めて、探して出かけていくような新しい時代の人の動きみたいなものが垣間見れたところが面白い。



石川初先生

団地の中でもやりようによっては様々な暮らしの背景を用意するという可能性を探求したのは、すごくよかった。パッチワークみたいなマスタープランも魅力的。



田中 伸彦先生

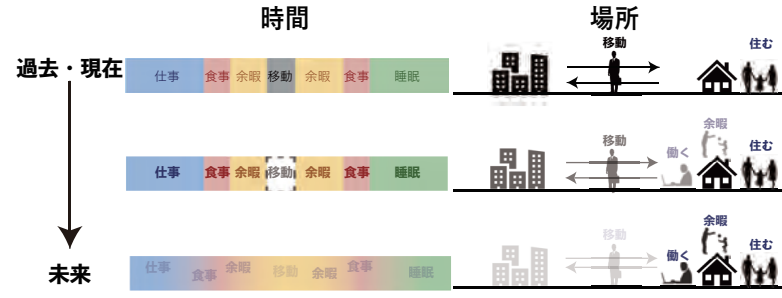
市街化区域だけでなく、農村部にもあそびの要素を拡張したらもっと面白いのではないかな。



畝森 泰行先生

今ある多様さをより拡張するっていうように、前向きに広げるというふうに考えたらいいんじゃないかな。

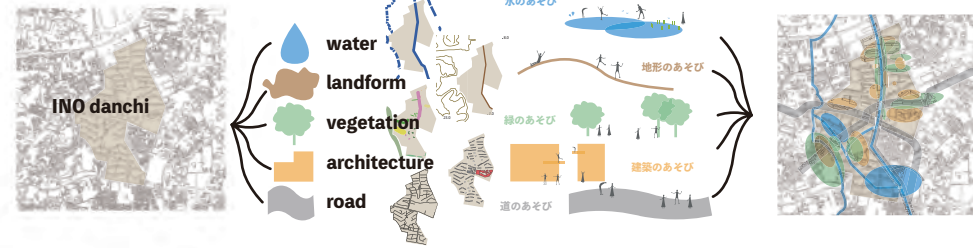
VISION: 暮らしの変化と郊外の未来



これからはオンライン化の促進により通学・通勤の「移動」が減り、場所や時間の制限が減ると予想できる。かつての郊外は住むことに特化し、都心へ時間をかけて通勤・通学するライフスタイルが一般的であったが、これからは自由で多様な暮らし方を個人が選択できるようになるだろう。人々のはたき方、まなび方、住まい方の多様性を受け入れ、場所や時間にとらわれず思いのままに暮らす＝「あそぶ」ように暮らすことのできる空間を生み出し、都心に依存しない郊外の未来像「郊外2.0」を提案する。

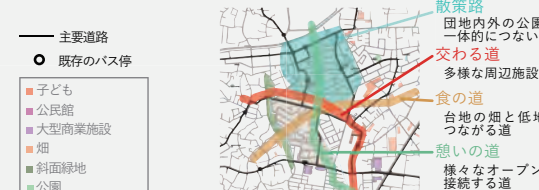
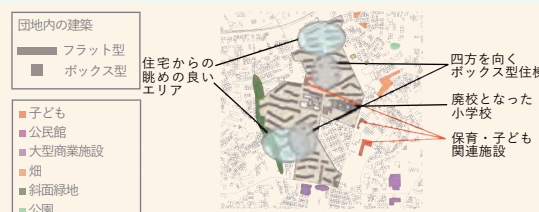
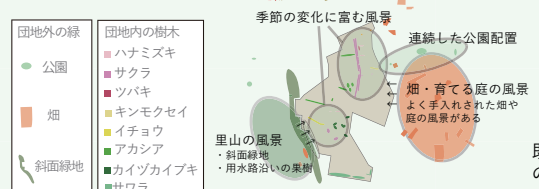
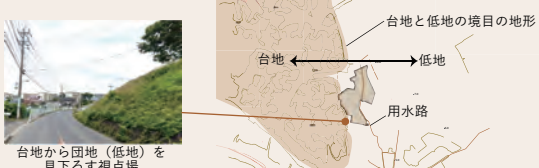
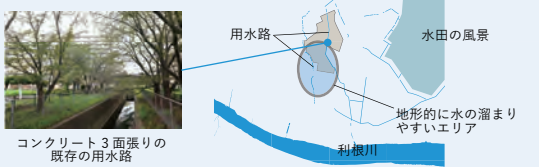
DIAGRAM: 空間の「あそび」を重ねる

対象地を構成する空間的な各要素の個性(ポテンシャル)を発見し、それらを活かすように形や機能を変化させることで空間に様々な「あそび」=空間に多様性を持たせる。それらの空間の「あそび」を重ねることで、様々な暮らし方を受け入れ、「あそぶ」ように暮らすことのできる空間を生み出す。

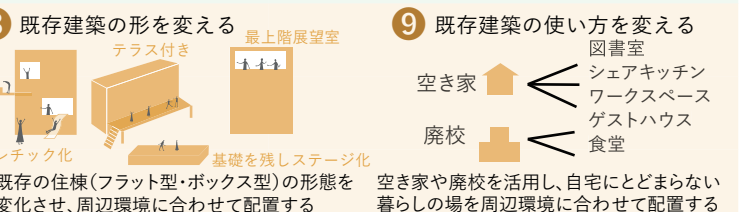
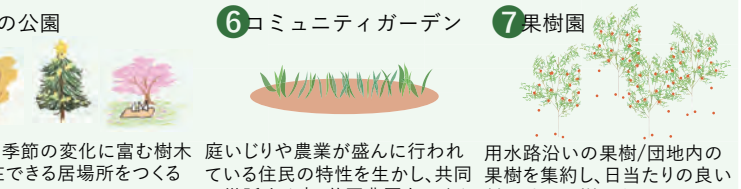
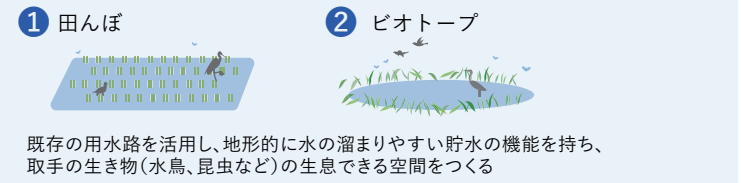


DESIGN

【STEP1】地域のポテンシャルを発見する

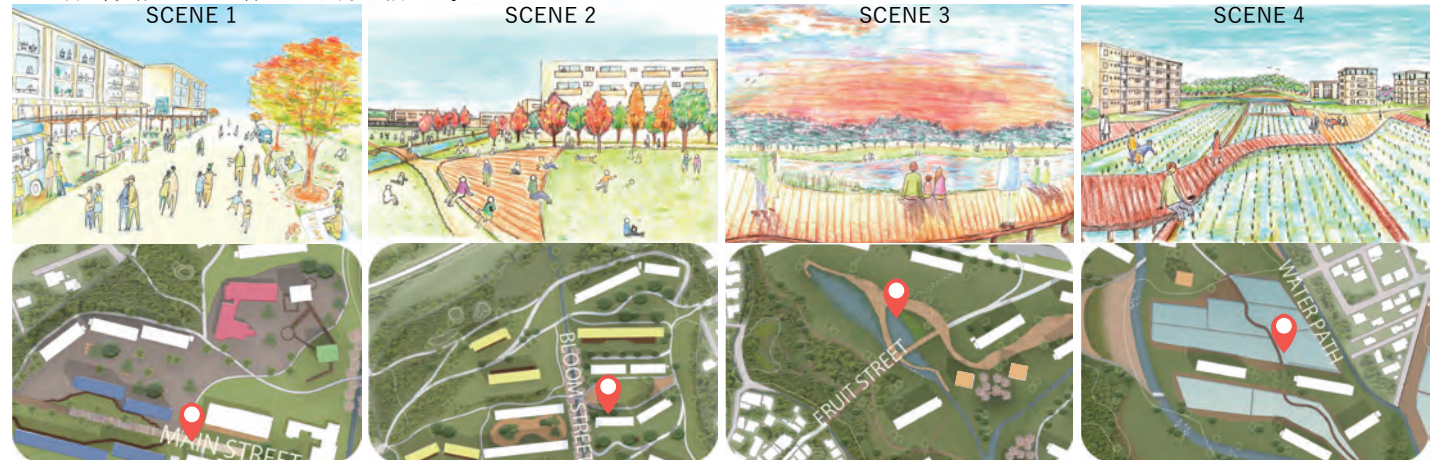


【STEP2】空間に「あそび」をもたせる



SCENE: 多様な暮らしの風景を描く

郊外という多彩で豊かな環境を持つ空間のポテンシャルに空間の「あそび」をもたせ、さらにそれらを重ね合わせることで、人々の暮らしが様々に混じり合う、多様で豊かな暮らしの風景を描いた。



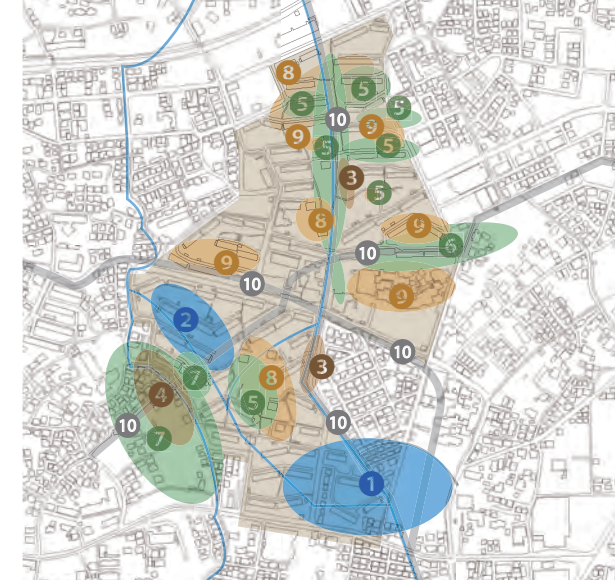
メインストリートでは多くの異なる個性の道が交差する。保育園のそばのアスレチック住棟であそぶ子供、住棟の閉じたオープンスペースで話す親たち、オンライン授業やリモートワークの休憩でフレッシュする人など、多様な人が交わる。

既存のハナミズキや落葉樹、桜並木など季節の風景、電車の通る風景が見られ、細かい道路は公園の散策路のようで、個性のある小さな広場・公園を巡れるようになっている。住棟には自由に休んだり、利用できる共同のテラスがあり、団地内外の人が回遊する。

西側の用水路沿いと斜面地に果樹園が広がり、里山のような丘から道をつなげ、「果物狩り」をしながら歩ける道が生まれている。ピオトープ沿いのデッキに座って風景を眺めると、取手市に訪れる鳥や昆虫たちが活動している様子や、里山の豊かに育った緑が見える。

奥に斜面緑地や水との親水エリア、手前に田んぼが見える。既存の用水路、里山から流れる水を引いた田んぼを住民が共同で育てる。共同農園と一緒に就農体験教室を行ったり、作物はメインストリートのファーマーズマーケットで販売したり、食を通じた交流が盛んに行われる。

【STEP3】空間の「あそび」を重ねる



空間の「あそび」の重なりは、それぞれの場所で生まれる人々の「暮らし」の重なりでもある。地域のポテンシャルを引き出した空間の「あそび」の重なりにより、この地域に今までなかった人々の活動の重なりを生み、この地域・取手らしい新たな郊外の「暮らし方」を提案する。



MASTER PLAN



空き家・廃校活用	改築	既存	オープンスペース
図書室	ステージ	ケアセンター	散策路
シェアキッチン	展望台	幼稚園/保育園	噴水ひろば
ワークスペース	アスレチック		親水ひろば
ゲストハウス+食堂	共同テラス		アスレチック
			コミュニティガーデン
			ピオトープ
			お花見公園
			プレイグラウンド
			メインステージ
			田んぼ公園



石川 初先生

団地はそれぞれ多様な土地利用と接しているため、外との関係が内側に入り込んでくることになってきたが多様化しているみたいなのもある。



畝森 泰行先生

もともとあった団地の環境が拡張した先に提案のようになっていくといいと思いました。



田中伸彦先生

コロナ禍になって実際に東京に行かなくなり、もう1時間ぐらい歩いたりしてすごく楽しんで暮らしています。とても共感できる提案。



三島 由樹先生

あそびってキーワードはすごく大事。これからは仕事や住みやすさも大事だけどやっぱりいかにあそびが楽しいか、ということが重要になる。

取手庭道

#庭道

#圃場



↑ 尾石 光

千葉大学大学院
環境園芸学専攻 M1



↑ 黄 琴

多摩美術大学大学院
環境デザイン学科 M1



▶ 瓜生 千晴

工学院大学
街づくり学科 B3



↑ 平野 柚葉

東京農業大学
造園科学科 B3



◎ 金淵 圭悟

東海大学
観光学科 B3



▶ 小澤 亮太

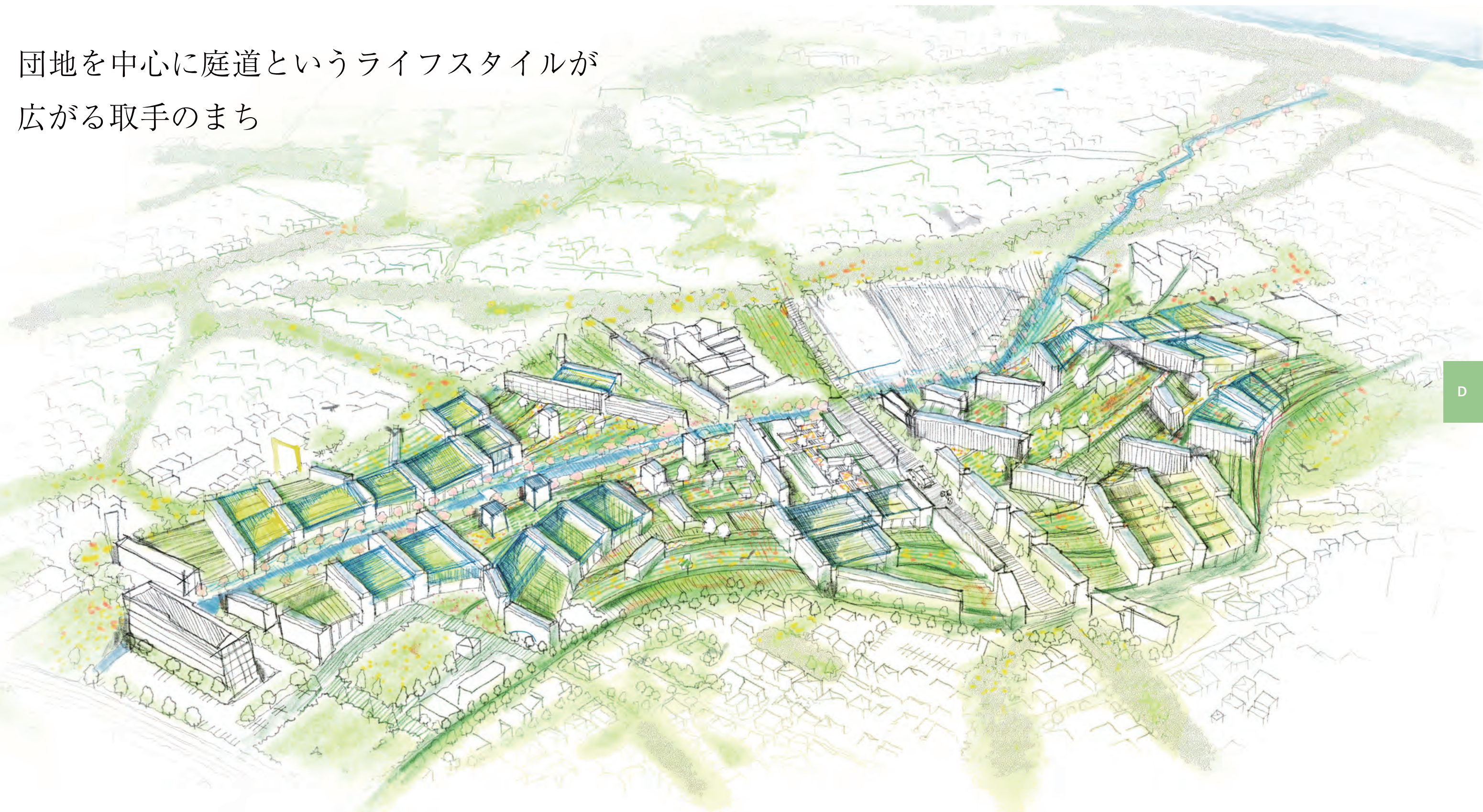
合同会社 HOC



▼ 大山 奈津美

株式会社 フィールドフォー
デザインオフィス

団地を中心に庭道というライフスタイルが
広がる取手のまち



向山 雅之さん

計画地が中心となり、各地に点在する空き地に伝染していく計画地にとどまらない仕組みが提案されていてよい。空き地問題に困っている郊外ならではのプロジェクトになりそう。



石川初先生

「取手の可能性」として「住む人が庭をつくる」が浮上してくるのはおもしろいな。あまり取手の住民には自覚されていない特徴かもしれないね。



向山 雅之さん

空き地が樹木が色々やってみようを実践できるコミュニティーガーデンになるとよいです。そこは大学や企業が入り、自然資源をどのように活かした生活を組み立てるのか？実証実験の場になるとよさそう。固定資産税優遇の促進策にもなりそう。



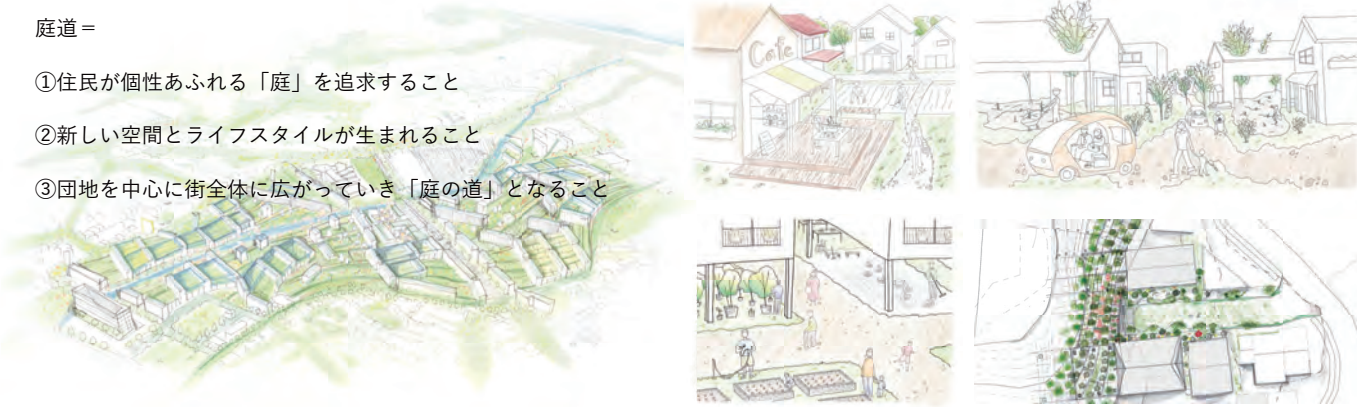
石川初先生

大学の園芸学部とか造園学科を誘致して「ガーデンキャンパス」にしてもいいのでは。

CONCEPT 団地を中心に“庭道”というライフスタイルが広がる取手のまち

庭道＝

- ①住民が個性あふれる「庭」を追求すること
- ②新しい空間とライフスタイルが生まれること
- ③団地を中心に街全体に広がっていき「庭の道」となること



STRATEGY 庭を育む気質を持った人々 郊外における空地と空き家

私たちが発見した取手のポテンシャルは庭を育む気質をもった人が多く居住していること、市内の空き地が増加傾向にあることです。団地の連続した構造物と広がりのあるオープンスペースを庭道の拠点として利用し、団地の新しい姿とまちに広がるプロセスを提案します。

POTENTIAL

庭を育む気質を持った人々



空地と空き家



①【団地の提案】

井野団地内に『“取手” 圃場』～人と緑を育む場～を提案する。仕掛けは大きく3つ。

- 1、団地の住棟を環境装置として、『ビニールハウス団地、大型灌水装置、種や植物のストック庫』として利用すること
- 2、団地内の地形、地質、周辺環境に合わせて、地形操作を行い、多様な自然環境をつくること
- 3、団地の商業エリアを利用した『栽培方法作法等の伝承のための研修所』『植物を売り買いする市場』『住み込みで働くことができる住居』

取手圃場団地



灌水装置・圃場の拠点



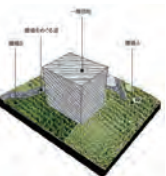
- ・ 師匠となる人が寝泊まりできる場。
- ・ 庭のモデルルームとして、庭見学ができる場。
- ・ 庭づくり愛好会。

種子バンク



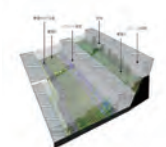
- ・ 壁を作ることにより生まれる日陰を生む。
- ・ 風通しがよく乾燥した環境を作ることができる。

青空圃場



- ・ 雨水利用した重力式灌水
- ・ 団地棟の高さを利用することができる。

ビニール圃場

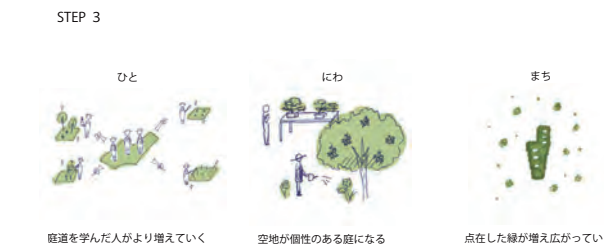
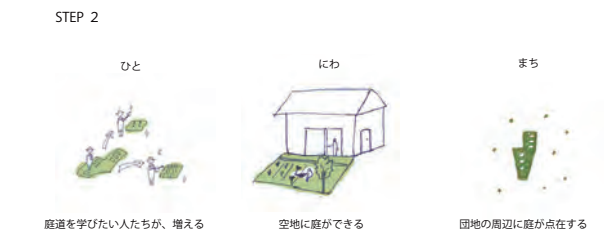
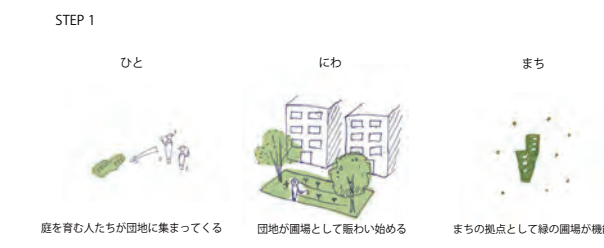


- ・ 環境装置によって作られる圃場の一つであるビニールハウス型圃場では、団地と団地の間に植物を育てることが可能。
- ・ ビニールでしか育てることができないお花や園芸。

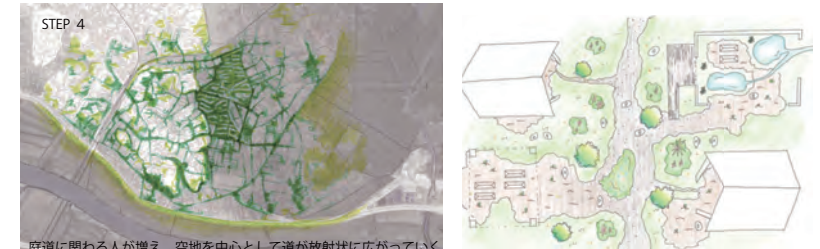
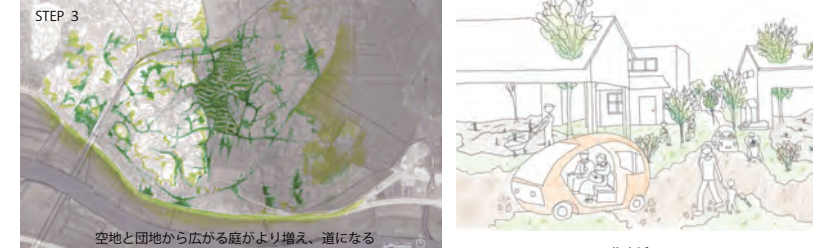
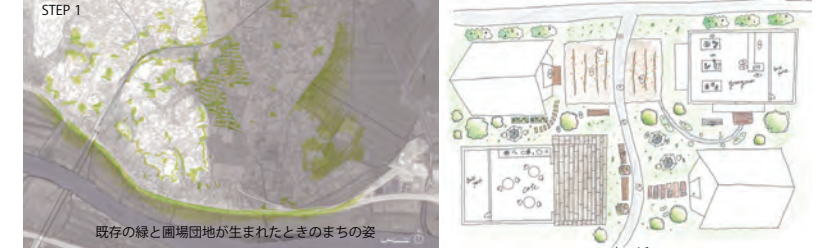
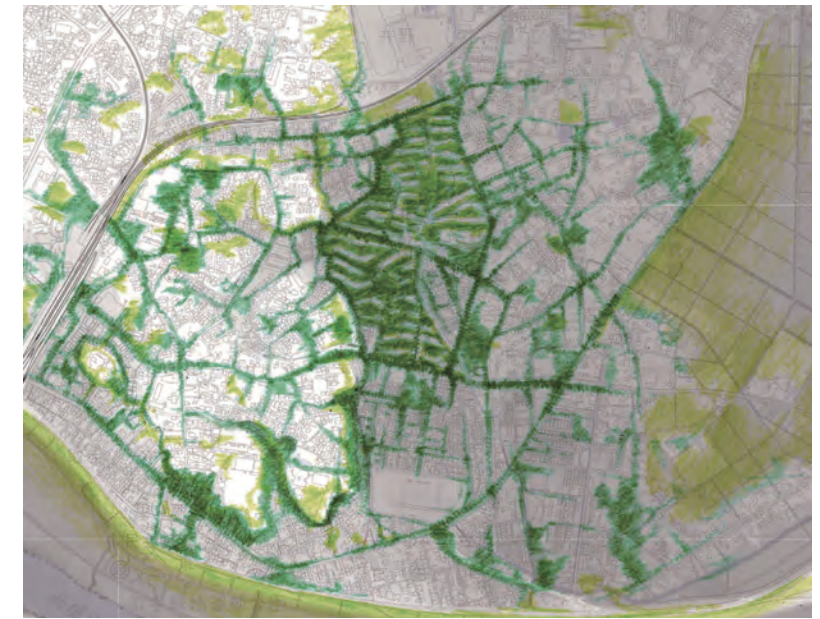
②【まちへの広がり】

井野団地の圃場を起点として段階的に庭道を極めた人と庭の道がまちに広がる。

- 1、圃場として整備された団地に庭づくりの技術と気質をもった「師匠」を招き、団地内の圃場に庭を展開。
- 2、「師匠」に庭道を学んだ「弟子」たちが、自身の庭や近所の空地にそれぞれの好みの庭をつくりはじめる。
- 3、庭道を習得した人がさらに増加し、各空地の地形や地質の条件と庭の作り手の好みによって、果樹園などといった多様な庭が広がる。
- 4、庭から生み出される副産物を庭を訪れる人へ提供しはじめる。空地の増加に伴い使用されなくなった道路等にも庭が広がりはじめる。



VISION 圃場を中心に”庭の道”が張り巡らされ庭道が生まれる街



石川 初先生
団地の建物を利用して造園学科の学生の寮にして、空地を実習のフィールドにする。

畝森 泰行先生
空き地に限らず、個人の所有の土地も、庭が好きならいけば面倒だと感じる人もいる。庭が広がっていくことでそもそも住宅の在り方が変わっていき、建築の提案にも関わってきそうだなと思った。

石川 初先生
個人の園芸活動のようなものをダイナミズムにして、みどりが浸透していくのは良い。学校とかと組み合わせるのもよさそう。水系の提案をしているグループと合わさっても面白いかも。

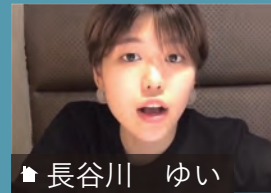
三島 由樹先生
ロシアのダーチャのように、提案を支える法律や土地所有の在り方もセットであるといいね。

水の庭

#エコロジカルネットワーク
#これからの農を考える



↑ 岩切 菜月
千葉大学大学院
環境園芸学専攻 M1



↑ 長谷川 ゆい
武蔵野美術大学
建築学科 B4



↑ 網倉 朔太郎
東京大学大学院
社会基盤学専攻 M1



↑ 細川 萌
東京農業大学
造園科学科 B3



↑ 松澤 直樹
日本大学
生命農学科 B3



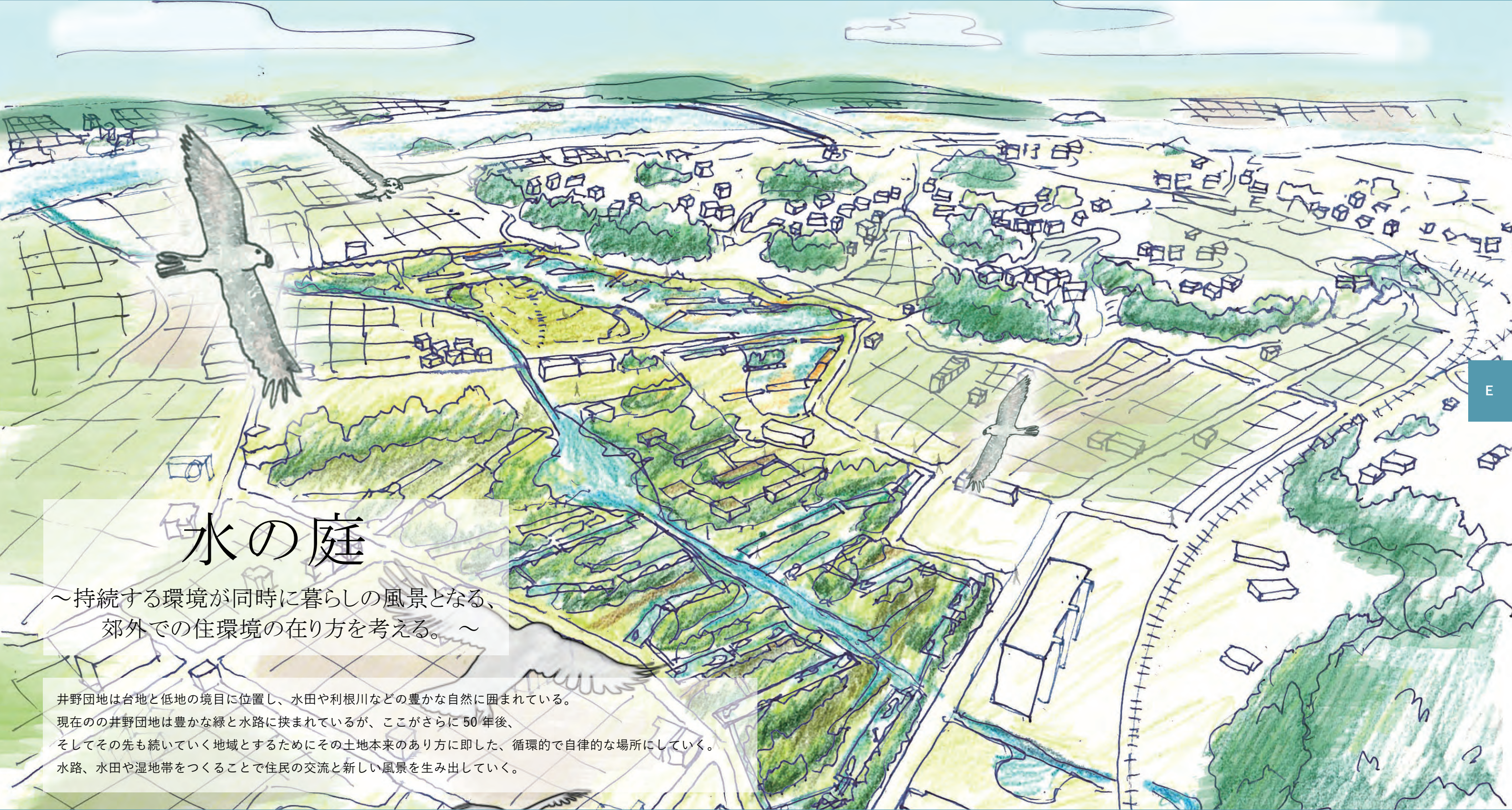
↑ 高沖 哉
株式会社ヒュマス



↑ 富士原 宏将
株式会社 プレイスメディア



↑ 岩瀬 晃 (サポーター)
株式会社 ヒュマス



水の庭

～持続する環境が同時に暮らしの風景となる、
郊外での住環境の在り方を考える。～

井野団地は台地と低地の境目に位置し、水田や利根川などの豊かな自然に囲まれている。現在の井野団地は豊かな緑と水路に挟まれているが、ここがさらに50年後、そしてその先も続いていく地域とするためにその土地本来のあり方に即した、循環的で自律的な場所にしていく。水路、水田や湿地帯をつくることで住民の交流と新しい風景を生み出していく。



石川 初先生

団地を解体していった元の自然環境に戻っていくというのは、共感できるが、団地も50年使われてそれも「地形」の一部としてもとらえられる。もっと団地としての土地の履歴を積極的に使ってもいいんじゃないかなー。水門として水をコントロールするとか。



高橋 靖一郎さん

100年後の農の成り立ちと団地が関係しても面白いですね。



向山 雅之さん

敷地に隣接する台地と水庭を作ろうとしている敷地の関係を考えてみても良いかもしれません。高台に人が住んで、低地は自然湿地に戻していく？

実際に敷地にこのような魅力的な水辺空間をついたら、人はそこで暮らしたくなるかもしれない。人が減っていくだけではなく、再び人の居場所として使われていくストーリーももっと提案されていてほしかった。



饗庭 伸先生

○CONCEPT

持続していく環境と共に暮らす、郊外での住環境の在り方を考える。

かつて郊外が郊外と呼ばれる前、人々は自然環境と共存して暮らしていた。しかし、郊外 1.0 では、自然環境との関係が薄れ「住むこと」が優先された。私たちは郊外 2.0 の在り方として、その土地に適した自然環境を暮らしの中に取り戻し、それが暮らしの魅力的な風景となっていく場を提案することで、50 年先のみならず、100 年先までも持続していく場所の価値を生み出せるのではないかと考えた。



○PLAN

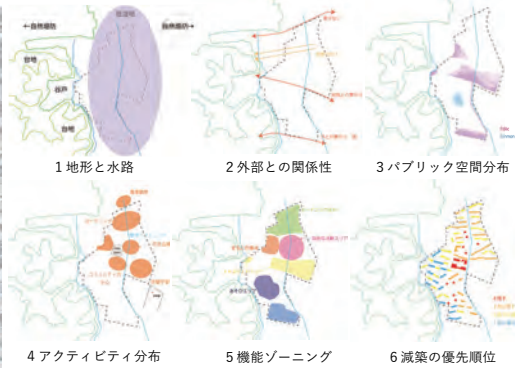


○SITE

その土地本来の在り方の上に暮らす。



○STUDY



○DESIGN

「自然環境を活かした住環境をつくる」

水 × 地形

内水氾濫のポケットをつくる。大雨による内水氾濫など、水害のリスクが高まっている。→水を貯留し、地域の防災に。



水 × ヒト

水田住居や貸し農園などといった、水を核として地域のコミュニティの場が生まれ、井野団地が地域全体の『庭』のような場所になる。



水 × 生き物

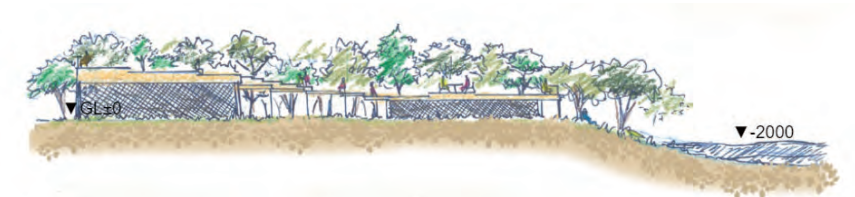
台地にいる生物、利根川流域にいる生物の居場所になる。→生物のネットワークが広がることで、周辺の田畑で安全で美味しい食物が作られる。



○Vision

湿地がつなく取手の生態系、住民たち

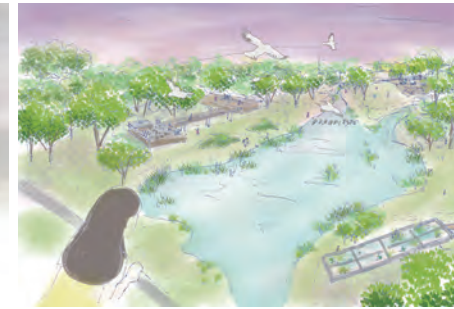
台地や利根川など取手周辺から井野団地内の水辺に、アマガエルやカルガモなど様々な生き物が集まってくる。また、水路はホテルの住処となるなど、多様な生き物が井野団地に住む。こうして、井野団地に住む人々は、湿地での暮らしを謳歌することができ、人々にとっても“団地”という居場所が残っていく。



森の空中回廊断面図



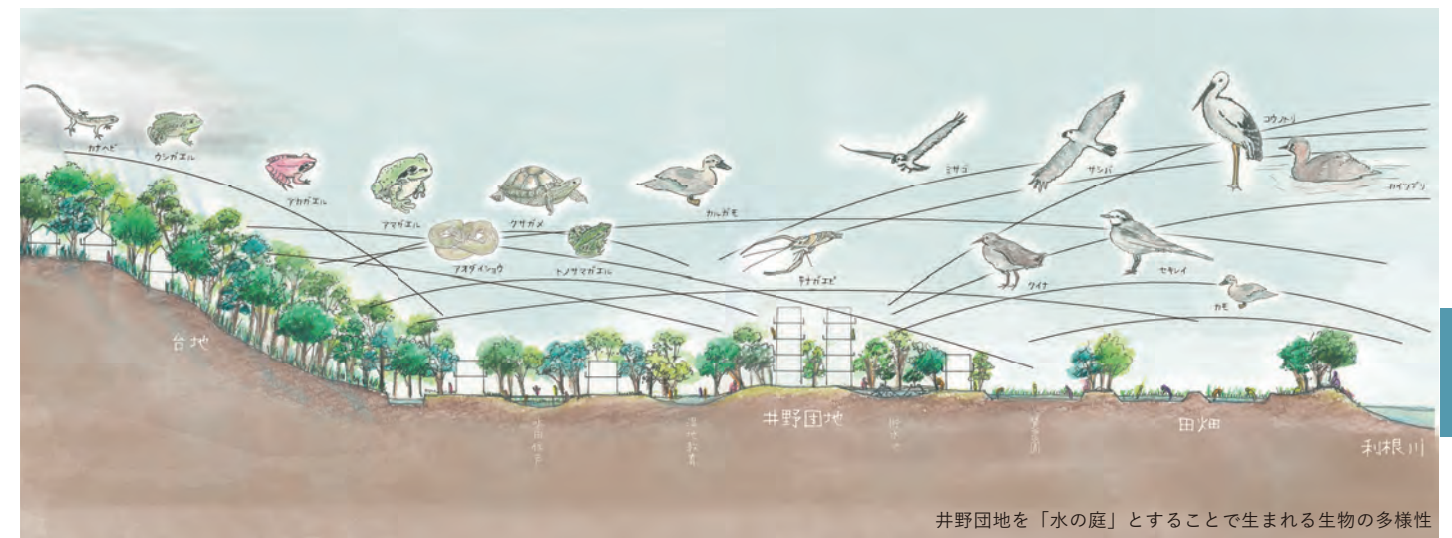
貸し農園のレストランからの景色



展望台から森の空中回廊と水の流れを眺める



水田住居の風景



井野団地を「水の庭」とすることで生まれる生物の多様性

○100年、そしてその先…



『水の庭』としての井野団地の姿



調整池の風景

水を呼び戻しながら、人の立ち入らない地面の領域を確保するなど、土地固有の生物の棲息環境を考慮したしつらえとすることで、台地と低地の間で断絶されていたエコロジカルネットワークが再びつながる。

また、この場所を拠点とする水鳥が周辺の田畑に対しても栄養となる有機物の物質循環を担うなど、地域全体の農業へ良い影響が波及していく。人は土地と深く関わり主体的に環境と関わって行く営みを通して、地域のコミュニティが形成・強化される、地域全体にとっての「庭」となる。



取手市 彦坂 哲さん

50年後、「郊外 2.0」から 100 年後の「郊外 3.0」までの提案となっているところが良いですね。



三島由樹さん

湿地のある環境作りというものが世間で注目されているが、どのくらいの水辺面積があることが、この地域、取手にとって合理的であるのか、という部分まで明快に示せるとより良かったですね。



高橋靖一郎さん

鳥に選ばれる街いいですね。新しい名物料理を作るとか。鳥を活かした水耕栽培で作った日本酒？



畝森泰行さん

50 年後、100 年後に関するプレゼンが印象的だったが、もうちょっと 5 年後、10 年後というような近い未来の風景が具体的にわかるようなプレゼンテーションも見てみたかった。

風景の提案における時空スケールの妥当性に目を向けること

全体を通して思ったことは、饗庭先生に都市を計画する視点からの話題を頂いたので、「提案したものが広域的にはどこに位置づけられるか」みたいなところにオチがきても良かったのかなと1つ思ったんですね。もう1つは、畝森さんが「5年後ぐらいの身近な話が出てきてもいいよね。」という話をされていましたけど、すごく身近で丁寧に読み解いている提案と広域的で大鉈を振るような提案とで、同じ案の中に含めうる風景の提案の時空のスケールの妥当性みたいなものがあるなということも思ったんだよね。身近なシーンで100年後とかをきちんと表現するのは難しいけど、来週・来年とかだったら丁寧に描けるし、都市レベル

で大胆な提案っていうのは100年後ぐらいのスケールじゃないとなかなか描けないみたいなの。そういう提案の時空のスケールのピントの合わせ方っていうのが提案するものの説得力としてあるよな、ということも思ったんだよね。

個人的にはこういうワークショップって大人はいろんな事情があって気を使うところを（学生は）空気読まない感じで大胆なことを提案して描いて見せるみたいな。今後のことを考えるときにその絵を思い出すざざるを得ないみたいなものを提示するところにパワーがあるという風に個人的には思っていて。そういう意味でBの砦にするとか、Eのように終末を描いている提案が

響いたというか、『最後は人が住まなくなり』みたいな案が出たのは良かったと思います。それから時空のスケールの話で、提案するもののフィールドとそこで起きていることと生きている人のライフスタイルにピントが上手く合っていて気持ちよかったのが遊びのC班です。合わせていたからその外側にいかなかったのがあれの魅力でもあり限界でもあったと思うんだけど。受賞した2案については俺がここで言うまでもないんだけど、議論の中でもとても評価が高かった。ただやっていることが違うのでなかなか比べられなくて難しかったんだけど、両方ともすごくこの限られたリソースと時間の中でとてもいい提案をしたなと思います。

お疲れ様でした。受賞されたグループおめでとうございます！本当に、素直に、この短期間、状況下で凄いクオリティの提案が上がってきて、それに共感したよね。『やればできるんだ』みたいな、『なんで普段からみんなこんなに頑張らないんだろう』みたいな（笑）。すごくそれに驚きましたし、やるじゃないかというか。色々と励みになりました。学生の皆さんは5年後ぐらいにチューターになって戻ってきてですね、是非このワークショップを支えてもらえたらなと思います。



石川 初
Hajime Ishikawa Landscape



畝森 泰行
Hiroyuki Unemori Architecture

皆さんお疲れ様でした。何ていうんですかね…割とレベルが高くてビックリしたという感じで。本当に今日は見ていて面白かったです。もしかしたら皆さんオンラインをしまくっているんで、会った時の爆発力みたいなものが今すごいのかもしれないですね。対面でやった作業の段取りの良さとか、進み方とか…そういうのがこれまでにない進化を遂げているような気がしました。



饗庭 伸
Shin Aiba City Planning



三島 由樹
Yoshiki Mishima Landscape

水と緑と土の相互関係 / 自然に対して人間の環境はどうあるべきかを考えること

今日の発表は水 vs 緑というようになってたんですけども。ものすごいお互いが影響し合うものだと思います。水と緑というのは。もう1つ足すとしたら土みたいな話があって、水と緑と土の3つの相互関係のデザインとか、そんなところがきつと皆さんの提案の先にあるのかなという風に思っています。

もう1つは、3つのもの、一言でいうと自然なんですけれども、あとは人間の暮らし環境っていうんですかね。それとの取り合いというのがあつたわけ。自然はあんまり訴えてこないの、人間は基本的に都合の良いように使ってきたのがこれまでの歴史で、その集積したものが都市というもの

なんですけれども、その人間の環境と自然の関係はどうなっていくのかということですよ。これまで通り都合よく使っていくという関係でいいのか、それとも水と木と土が育ちやすいように人間の環境を変えていくのか、ですよ。そんなところがありそうかなという風に思っていました。

BとEは僕も石川さんと同じで、かなり長い先の話を見るところはすごく良いなという風に思いました。ただ、これも石川さんや畝森さんがおっしゃってましたけど、『じゃあ明日どうするんですか？』という話なんです。それは取手の彦坂さんが問われるわけですよ、窓口で。そこまできっちり逆算してデザインできていると

とても良いんだろうなと思いました。Cは特に人間環境の方に寄ったと思うんですね。で、僕だったらこうする、という話をするともうちょっとたくさんモデルをつかって、それが重なり合ったところで必要な空間という風に説明してもらったら、たぶん僕の中での評価はすごく上がってました。結局都市を支えるのが人じゃなくて人を支えるのが都市だという風に思っているんで、やっぱり色々な人のシミュレーションを走らせてみて、重なり合ったところで何か見えてくるあたりの、プレゼンで言うと逆なんです。もしかしたらプランニングそういう風にしてたのかもしれないんですけど、これからの参考にしていただければという風に思います。

肯定から始まる提案 / 見えるもの・見えないものをもとに提案すること

ランドスケープということで、僕は建築家なので若干畑違いなのかもしれないですけど、でも聞いてると同じなんだっていうのは思いましたね。やっぱり建築も長い時間かけて、長い先を考えていくべきだし、その延長にランドスケープがあると思うのでやっぱり建築もランドスケープも同じことを考える必要があるし、今回そういうチームが生まれていると思うんですけど、それがプレゼンテーションにも表れて良かったなと思いました。

僕はそもそも今ある団地の環境ってすごくいいなあと考えたんですね。何かそれを否定することなく、肯定から始まったら全然違った提案になった気がします。

どんな社会に出てもそうだし、否定から入らないような考え方を持つと、受け取る側にとってもだいたい違う印象を持てるので、それは意識して欲しいなあと思います。特にこのコロナの状況ではすごく大事だと思ったんですね。今ここで生きている人を前提として、その人たちを前向きにするような提案がD班はすごく良かったなあ。井野団地を見て僕はすごく多様だと思ったんですけど、一方で団地自体の個性がないなあっていうのはすごく気になりました。その個性をどう出していくかが結構大事で、庭をつくっていくことが一人一人の個性をつくっていくのは何かあるなあと思ったんですね。これは行政の人が受け入れられ

やすく現実的な案だっていう話もあったんですけど、僕の中ではかなり野蛮なので、おそらく人によっては個性が表れてなんか凄まじい庭ができたりとか、置物がいっぱいある庭ができたりとか、そんなのがワァーっと増殖したら見たことないような庭のランドスケープが広がるんだろうなあ。

最後に、これからはやっぱりずっと先の事を考える上で、見えるもの・見えないもの両方を何か考える必要がある気がして。建築にせよランドスケープにせよ、現実的な見えるものをデザインしたり提案するんだけど、そうじゃなくて実際にそこに見えないものをどう提案していくかっていうことも意識してもらえるといいんじゃないかなあと思います。

皆さんお疲れ様でした。石川さん、饗庭さんがおっしゃっているように、すごく良かった。嘘偽りなく、「よく頑張っているなあ」「よく頑張ったなあ」と思いました。いろんな手段で自分の考えを見て、考察するって結構大事だと思うので、そういう機会を設けることができると、今自分たちが考えているものをもっと次に繋げていけるんじゃないかなあと思います。ありがとうございました。

本当にお疲れ様でした。多分皆ぎりぎりまでやってたんだろうなあっていうのは想像ですけどもしていました（笑）。サマスタは昔にちょっと顔出させていただいたことがあるんですけど、本当に今回改めて『すごい良いプログラムだなあ』『本当に愛にあふれている』というか。みんながこのプログラムを『良いワークショップにしよう』という気持ちですごい全体から感じられて、僕も大学生の時にこのプログラムがあったら参加したかったなあって、すごく思いました。

何かを再定義するところまで徹底的に議論をすること

今回とても自分の中で期待していたのは、郊外2.0というタイトルで何かを再定義しようとするワークショップだったと思うんですけども、その中で何か新しさだったり、自分の中で大きなキーワードみたいなものが皆さんのプレゼンテーションから感じられると良いなと思ってました。で、そういう意味では何かを再定義するところまでいききってなかったのかなっていう気がします。それはやっぱり、何か発想で突破するというよりは、議論する時間というものもやっぱりもっと必要だったのかなあという気はしました。なので、2.0っていう今回の命題に関して、皆さんこの先があるんじゃないかなあと思っています。

ここからさらにですね、今回出会ったチームの皆さんと一緒に議論を深めていって、本当に自分たちの中で郊外2.0である、これが郊外2.0のビジョンである、というところまで行きついてほしいなあっていう風に思います。それが全体の感想なんですけど、今回zoomっていうこともあって、すごくこう、なんていうか、ちょっと物足りなかったのは、皆さんのパーソナリティみたいなものが全然わからなかったっていうところがあります。画面を見ていると、皆さんがすごく仲良くなっていて、いいチームになっているなあと感じられる中で、ゲストとしての距離感みたいなものがすごい遠いものを感じていたんですが…。

何が言いたかったっていうと、プレゼンテーションの中にパーソナリティをもっと出していいんじゃないかなあと思うんですね。一人一人の個性みたいなものが伝わってこないのが課題かなあと思います。言い換えると、もっとそういうのを出していいんじゃないかなあ。こうやってチームの中で議論して自分はこういう風に思ったから、こういう風になったとかですね、なんかその辺をニュートラルにしすぎたかなあっていう風に思いました。そういったところは今後皆さん、ぜひ意識してもらえたらなあと思います。

彦坂 哲

(取手市役所政策推進部・政策推進課 課長)

まずは学生の皆さん、チューターの皆さん、そして関係者の皆さん、本当に短い時間でしたが大変内容の濃いものを見せて頂きました。お疲れ様でした。どれも本当に甲乙つけがたく、どれが最優秀、優秀であってもおかしくなかったと思いますので、どの学生の皆さんも今回きちんとやり切ったことについては本当に自信を持って頂ければと思います。何よりですね、今回テーマとして選んでいただいた取手市と密度の濃い時間、距離で向き合っていただけで、このような面白いご提案、本当に良い意味で面白くて楽しいご提案いただけて、本当に良かったと思っています。

本日は本当にありがとうございました。お疲れ様でした！

三島 徹也

(ICI総合センター長・前田建設工業株式会社 執行役員)

今日は素晴らしいプレゼンテーションを見せていただいてありがとうございました。学生の皆さんもお疲れ様でございます。今日のサマリーのPDFを最初見る方法がよくわからなくて、結局見ずにこの会に臨んだんですけど(笑)。いきなり「人はいなくなるよ」というような提案(B班)で、「これはどうなることか」という風に変な驚きがありました。プレゼンテーションの質も高かったのも、二重の驚きでしたが、最初(の発表だったB班のプレゼン)はすごくインパクトがあって、「これからどうなっていくのかなあ」と思いながら見ていきましたが、(班を追うごとに)さらにどんどん、プレゼンの質も高くて、素晴らしい会に招待していただいたなあと思って感謝しております。

特にICIキャンプを今回ご提供しましたが、学生の皆さんから非常に好評だったということを知って、嬉しく思っています。ただ、こういうコロナの中なので、中途半端な形での提供になってしまいましたので、もし機会があれば、ぜひ来年ですね、あそこの宿泊所も使った形でコロナも克服して、また会が開ければ面白いなあと思っています。学会の皆さん、またご検討いただきたいなと思います。

以上、私からのお礼の言葉とさせていただきます。学生の皆さん、大変お疲れ様でした！

造園学会関東支部長より



阿部 伸太

(東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科)

まず、今回この企画は学生の皆さんがいてこそ企画ですので、こんな(大変な)状況の中で頑張っていたことに本当にありがとうございます。お礼申し上げます。チューターの皆さんも、企画から始めて連休中も付きっきりで、本当にありがとうございました。

今回、企画側から(5チームの作品から)上位2つを選んでくださいということだったので、甲乙つけがたいという中で無理して上位2つを土俵にのせたわけですが、そうじゃなかったチームも非常に僅差で良いところもいっぱいあったんですけど、そういった意味では本当に残念でした。ただ、どのチームも本当に良い部分がありましたので、切磋琢磨していただけたらなあという風に思います。

最後に、今日ゲストでお越しいただいた先生方ですね、長い時間お付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。それと今回ご協力いただきました、取手市の方、それからICIの前田建設工業さん、本当にありがとうございました。



スタディを重ねる...



見事なソーシャルディスタンス。



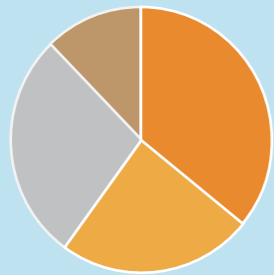
学生アンケート

サマースタジオ 2020 に参加した
全 24 名の学生にアンケートをとりました。

01…参加して身についたこと

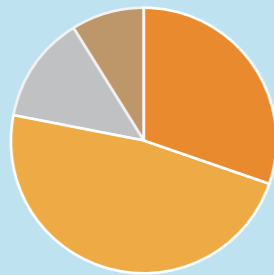
■ 身についた □ 普通
■ 少し身についた □ 身につかなかった

プレゼン能力



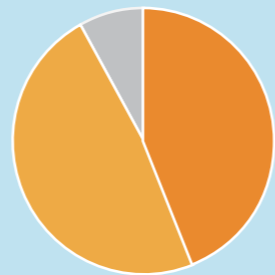
サマースタジオではプレサベイ期間に毎朝経過発表としてプレゼンを行っていました。よって今回のサマスタではプレゼン能力が身についたと感じた学生が多くいました。

デザイン能力



美術系の大学の方の参加も多く、お互いが刺激し合って良いワーク期間が過ごせたと思います。また、緻密なデザインから人に伝わりやすい簡単なスケッチまで様々なデザイン能力が身につきました。

企画力



企画力が以前より身についたと答えた人が9割を超える結果となりました。わずか1週間という短期間で調査、討論を繰り返し1つの提案を出せたことは、学生にとってとても良い経験になりました。

02…初参加者に聞いてみた！サマスタで学んだこと

他大学、他分野、他学年の人たちと一緒に提案をする機会がありません。いつもとは違う視点や考え方を知ることができ、とても貴重な経験になりました。そして大学ごとのカラーも少しわかり面白かったです！



A 班 前川桃香

初めてということもあり最初は不安もありましたが、班員やチューターの方から自分が知らない、デザインの手法や企画の構想力を学びました。年齢も大学も異なる方と学ぶことができとても良い刺激になりました。



C 班 徳永結衣

サマスタに参加するのは初めてでしたが、様々な分野の方と関わることで視野が広がり、技術的にも精神的にも自分が成長したと感じています。今回の経験を活かして、これからもランドスケープを学んでいきたいと思います。



D 班 平野柚葉

03…各班の印象に残ったこと！

A 班

農大 4 年生の田中晋さんが最終日の最後に
チームメイトの前で歌ったこと。



B 班

対面で初めて会ったとき
zoom と印象が違いすぎて集合できなかった。(笑)



C 班



ワークショップ期間中に作業場のある関内の
観光スポットを巡り、関内に詳しくなったこと。

本番直前にリーダーのパソコンの画面が割れました。



D 班

9/22 発表時の質問に対して、
1 を聞いたら 10 を答えるみんな。(笑)

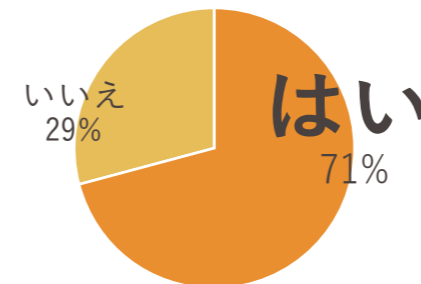


E 班

04…感想

- ・学生の可能性を広げるというチューターの皆様の思いが、とても伝わってきて最後までやり遂げられました。本当にありがとうございました。
- ・ランドスケープについて知らないことばかりで学ぶことがとても多かったし、知識としてだけでなくその場に身を置くことで感じることはとても多かった。運営の方も多くの時間を割いて学生に学びを提供してくださり、とても感謝しています。
- ・大変良い学びになりました。チューターの方が付きっきりでアドバイスを下さったので、プロの考え方や見方が学べました。また、自分の得手・不得手が明確になったので学部生活残り半年、卒制・卒論を通して、できることをさらに増やします！！
- ・関東の人々と交流する中で、幅広い考え方を教わり、自身の設計能力などの現在地を確認することができました。

05…来年もサマスタに参加しますか？



今回のサマースタジオは大学院生や学部 4 年生が多い中、
来年も参加したいという声が多く寄せられ、密度の濃いワーク
ショップが開催できたと思います。

チューターコメント

チューターの皆さん、短い間ではありましたが大変お世話になりました！
私自身チューターさんから沢山のことを学び、経験することができました。
最後に自分の担当した班に向けて一言お願いします！



まとめ編集委員会



A班 岸孝

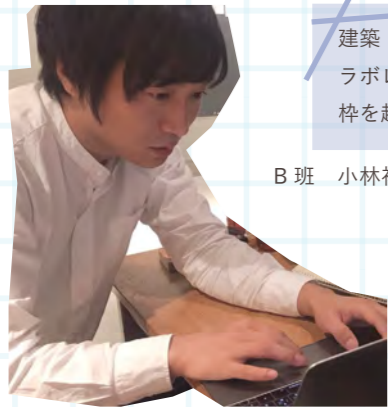
一貫したビジョンを元にした提案が充実した成果に繋がったと思います。知り合った仲間を大切に今後の活動の糧にしてください。

個性あふれる楽しいチームでした。これからも自分が思い描く理想の風景、社会、生き方を妥協せず探究し続けてください。

A班 木滑公人



A班の描いた水上で暮らす新しい生活様式の提案はこれまでになく、とても斬新で刺激を受けました。



B班 小林祐太

建築・土木・ランドスケープの異分野混成チームがコラボレーションによってお互いに作用し、それぞれの枠を越えた提案ができたと思います。

Bチームの皆は取手市が抱える人口減少という、リアルな社会とのつながりに向き合うというミッションについて深く考えられていたと思います。

B班 井野貴文



B班の取手市の抱える課題に向き合い、取手市の50年後を見据えた提案はとても考えさせられました。

中々身動きのとりにくい時期でも積極的にWSに取り組んでいて素晴らしかったです。頭と手についた「デザインする癖」を今後も忘れずに！

C班 原崎寛明



C班 鬼塚知夏

他チームよりも少人数でしたが、だからこそ全員が集中して手と頭を動かし、全員が納得するまで議論ができ、良い纏まりができていたと思います。

C班の取手市が持つ遊びの可能性を見つけ出し、それらを発展させた提案はこの土地ならではのものと感じました。

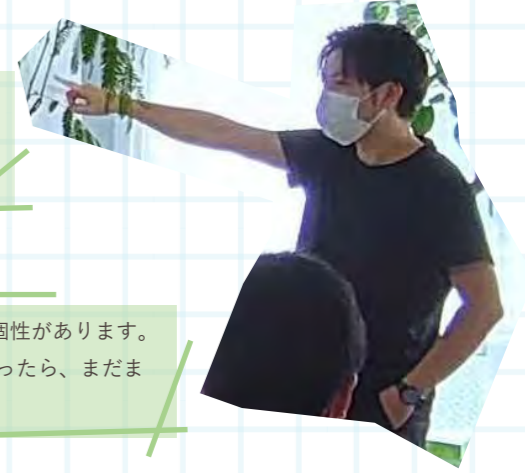


地域と人のポテンシャルを自分たちの視点で観察し、それを活かした将来の生活と風景を楽しく真剣に考える姿勢が素敵でした。

D班 大山奈津美



Dチームのみんな、奮闘したし、魅力的な個性があります。でも、今回のwsで悔しいと感じていなかったら、まだまだ本気にもなれていないとも思います。



D班 小澤亮太



D班の取手市が持つポテンシャルを見つけ出しそれらを活かした庭道の提案はとても興味深かったです。

個々がしっかりと主張を持ち、それを尊重しながらチームの意思を築き上げたメンバー皆さんの姿が本当に素晴らしかったです。

E班 高沖哉



充実したワークショップになったのは、偏に皆さんの懸命な姿勢あつてのことだと思います。心打たれ、学ばせていただきました、ありがとう。

E班 富士榮宏将



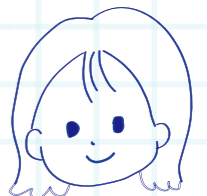
チームの一員として取手市井野団地の未来への提案に関われたことに、Eチームの学生、チューターの諸先輩方に感謝致します。

E班 岩瀬晃 (サポーター)



E班の描く水のある豊かな暮らしと50年後の取手市の風景はとても美しく郊外の可能性を感じました。

チューターの皆さん、暖かいコメントありがとうございました。これからの人生、チューターさんから学んだことを生かせるよう頑張ります！



スケジュール



井野団地の風景

キックオフ
ミーティング
@ZOOM

9/12



⑧Zoom と印象が違いすぎて
集合できなかった！
午後は雨が降りみんなびしょ濡れに…



空地でくつろぐ野良猫

③団地周辺の果樹の話や緑あふれる
ガーデン神社の話で盛り上がる



プレサーベイ期間
スタート

9/13



⑩団地内の広場で住民の方に聞き取り調査
自転車に乗りすぎて翌日は全員筋肉痛



④作業の休憩にみんなで
並んで仲良くランチ



9/15



⑨取手図書館で情報収集
お昼ご飯はインドカレー

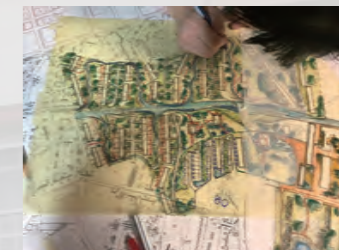
①プレサーベイで得た情報をもとに
マスタープランを練っていく



⑥美しい水路の流れを追求して
何枚も図面を描いて検討



⑤極限状態で平面図を書いている様子
ラストスパートをかけていく！



ワークショップ期間
スタート

9/19

各班 ZOOM で
ミーティング



①ICI キャンプでサーベイ結果発表
意気込んで記念撮影！



⑦発表で頂いたアドバイスをふまえて
ひたすら庭について考える



9/20



⑩発表用のパワーポイントを作っていた
リーダーのパソコンが壊れる大事件発生！



③平面図に周辺環境を
書き込んでいく



9/22



STUDENTS

[工学院大学]

瓜生千晴 建築学部まちづくり学科 B3

[多摩美術大学]

張夢瑗 環境デザイン学科 M2
黄琴 環境デザイン学科 M1

[東海大学]

金淵圭悟 観光学部観光学科 B3

[東京大学]

網倉朔太郎 工学系研究科社会基盤学専攻 M1
上林就 工学系研究科社会基盤学専攻 M1
山本実南 工学部建築学科 B3

[東京工業大学]

草野帆南 環境・社会理工学院都市・環境コース M2

[東京電機大学]

米ヶ田里奈 未来科学部建築学科 B4

[東京農業大学]

田中亮平 農学研究科造園学専攻 M1
山本翔太郎 農学研究科造園学専攻 M1
田中晋 地域環境科学部造園科学科 B4
平野柚葉 地域環境科学部造園科学科 B3
細川萌 地域環境科学部造園科学科 B3
前川桃香 地域環境科学部造園科学科 B3
徳永結衣 地域環境科学部造園科学科 B2

[千葉大学]

岩切菜月 園芸学研究科環境園芸学専攻 M1
尾石光 園芸学研究科環境園芸学専攻 M1
稲村友里 園芸学部緑地環境学科 B3

[名古屋市立大学]

徳永啓祐 芸術工学部建築都市デザイン学科 B4

[日本大学]

松澤直樹 生物資源科学部生命農学科 B3

[法政大学]

相澤航平 デザイン工学研究科都市環境デザイン工学専攻 M1
加計幸陽 デザイン工学研究科都市環境デザイン工学専攻 M1

[武蔵野美術大学]

長谷川ゆい 造形学部建築学科 B4

TUTORS

井野貴文 [株] グラック 大山奈津美 [株] フィールドフォー・デザインオフィス 木滑公人 [株] 日建設シビル 小澤亮太 [同] HOC

鬼塚知夏 [株] スタジオ・ゲンクマガイ 岸孝 [株] プレイスメディア 小林祐太 [株] プレイスメディア 高沖哉 [株] ヒュマス

原崎寛明 [株] ハイアーキテクチャー 富士榮宏将 [株] プレイスメディア サポーター 岩瀬晃 [株] ヒュマス

GUESTS

饗庭伸 (9/12 話題提供、9/22 審査員)
東京都立大学 教授

石川初 (9/12 話題提供、9/22 審査員)
慶応義塾大学 教授

畝森泰行 (9/12 話題提供、9/22 審査員)
畝森泰行建築設計事務所 代表

三島由樹 (9/12 話題提供、9/22 審査員)
株式会社フォルク 代表

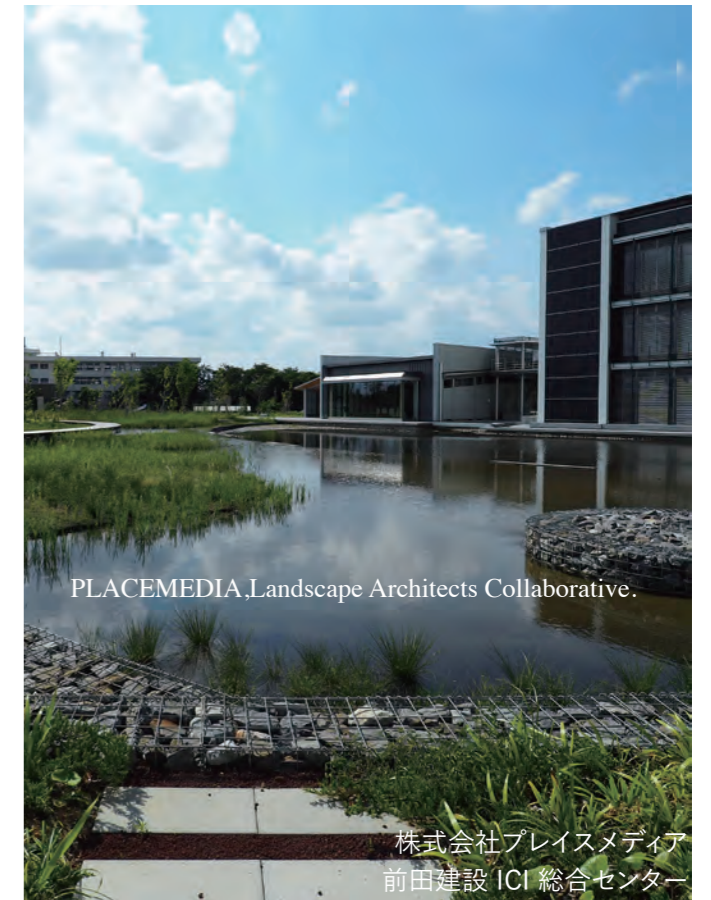
阿部伸太 (9/22 審査委員長)
日本造園学会関東支部長、東京農業大学地域環境科学部造園科学科 准教授

三島徹也 (9/22 審査員)
前田建設工業 ICI 総合センター長

彦坂哲 (9/22 審査員)
取手市政策推進部政策推進課 課長

中川勇紀 (9/12 話題提供)
取手市役所政策推進部政策推進課

Summer Studio 2020 ご協賛・ご後援企業



活動記録



まとめ本委員会編集後記

[編集長]

山本実南 初めて話すメンバーも多い中 ZOOM でのやり取りには苦労しましたが、その分編集委員と対面できた時の喜びは計り知れないものでした！今年のサマスタを振り返り、見つめ直す貴重な機会を皆さんと共有できて嬉しいです。ワークショップに続けて、多様な学生、そしてチューターの方々と一つのものを作り上げる環境にいられたことに感謝します。世の中が落ち着いたら編集委員のみんなと会いたい！！

[副編集長]

細川萌 今回副編集長を務めさせていただいた中で、WS 期間とはまた違った貴重な経験を得られました。また編集委員に参加したことで、チューターさんを含め、他のチームの方々と話すことができとても嬉しかったです！ZOOM での作業が主となりましたが、みなさま本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました！

[全体デザイン担当]

岩切菜月 今年のまとめ本は表紙以外を学生で1からデザインできた楽しさ半面、大変な部分も多かったのですが、例年とは一味違う個性的なものに仕上がったと思います！多くの人に読んでいただけたら嬉しいです！

加計幸陽 ここまでやってきたサマスタの成果を1つにまとめあげ、今まで別々だったチームが一丸になって集大成を作り上げられたことがとても嬉しかったです！皆さんありがとうございました。

[概要ページ担当]

草野帆南 限られた時間の中で、素材集めから文章、レイアウトまで自分たちで行うのは大変でしたが、まとめ本のように形に残るものの製作に携われて良かったです。特に中心になってまとめてくださった方々には感謝しています。

田中晋 昨年に引き続き、まとめ本委員に携わり、変化が随所にあり、刺激的だった。在籍している研究室でまとめ本のようなものを作成しようと考えていたので、今回の各々の成果物や話し合いを参考に活かしていきたい。

金淵圭悟 様々な面で未熟な編集委員でしたので、他の編集委員やチューターの方々には頭が上がらない思いです。併せて、このまとめ本に目を通してくださった方々に感謝申し上げます。

[総評ページ担当]

上林就 コロナ禍のためWS 期間に全参加者が集まるような機会はそう多くありませんでしたが、まとめ本の作成ではあまり関わりのなかった他の班の学生とも交流を深め、新たなつながりを広げる貴重な機会となりました。

田中亮平 総評をまとめていく中で、他分野の学生・実務者の方々と議論して追求するというのは貴重な体験、経験すべきことで、自分が学部生の時に参加しなかったことを後悔するほど有意義なものであったと改めて感じました。

[活動記録ページ担当]

平野柚葉 スケジュールをまとめるにあたって、各班から写真とエピソードを募集したのですが、班ごとに様々な特徴が出ていて面白かったです。もし片付けをしてまとめ本が出てきたら、読み返してサマスタのことを思い出してくれると嬉しいです。

前川桃香 レイアウトを考えてデザインすることは初めての経験だったのでとても楽しかったとともにもっとスキルアップしたいと思いました。そしてこれをきっかけに知り合った他の班の方とのつながりも大切にしていきたいです。

徳永結衣 編集ソフトを使っただけの作業が初めてであったので最初は苦戦しましたが、とてもいい経験になったと感じています。また相手に伝わりやすい構成やデザインの仕方について学ぶことが出来ました。

